
勇者の勇者による勇者のための

白金千乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の勇者による勇者のための

【コード】

N8819U

【作者名】

白金千乃

【あらすじ】

この物語は、
剣と魔法と最新機器の世界で、
悪役のような高笑いをする勇者（主人公）と、
死んだ魚のような目をした少女（ヒロイン？）が、
家賃を滞納しながらお送りしております。

*作者サイト Pt.78 (http://muu.in/c_hino/) にも掲載しています

登場人物

カンラ

勇者だがその行動には”悪役”という言葉が似合うことが多い。自分に甘く他人に厳しくがモットー。だが困っている人は助ける主義。

アルマ

死んだ魚の様な澄んだ目をしている魔術師。さばさばしてるがお茶目な性格だが空気は読める。

兎

毒舌家で容赦が無いが自身もそこそこに不運。騒がしいわけではないがよく叫ぶ。忘れられがちな回復役。

レーヴェ

白銀髪で布や飾りの多い服を着ている。神出鬼没で人をからかうのが趣味。老人口調でしゃべる。

ノウラ

黒髪に黒い瞳、黒い服に身を包んでいる。性格口調ともに丁寧だが好奇心が強い。迷子の達人。

アンジェリト

通称アン。アンジエと呼ばれるのは嫌らしい。自他認める武器マニアであり、特に剣が好きで仕方が無い。

アリオス・シュトラウス

金髪碧眼の騎士団部隊長。冷静な性格。
ノウラのお隣さん。

設定（前書き）

用語や世界の設定説明。 随時追加。

設定

「機関」

それぞれの目的により結成され、その目的のために行動する組織。

国が運営するものから民間によるものまで多彩。

《ハロウ》

民間の中でも規模が大きい機関のひとつ。
他方から仕事を請け負い、各職業者に仕事を割り振る。

《十字の鉄槌》 マレフィカルム

廃魔主義機関。その思想を説き、布教する活動と、魔の排除を行っている。

典型的な魔女批判組織。

「騎士団」

国に仕える存在であり、その使命は国を守ること。軍の役割を持つ。

幾つかの部隊が存在している。

「請負賊」 コントラクター

”雇い主”によって命じられることで、その名の通り仕事を”請け負う”賊。

一般の賊と違い後ろ盾があるため騎士団が手を出せないことがある。

また、ハロウからしても簡単には捕まえられない厄介な存在。

「魔女」

生まれつき魔力を持つ種族で、魔術の使用に詠唱などを必要としない。

いまだなぞが多いが、魔術の開発や提供を行っている。

「魔賊」

魔女崇拜の組織。その目的は”魔女”そのもの。

各地で様々な騒ぎを起こすことも多く、機関としては認められていない。

「神羅」

神獣を祭る集落。人目につかない隠れ里に住んでいる。

里特有の掟等があるが、時代に対応しつつある。

普段から鍛えており、武術を操る。”生身”の戦闘に強い。

「勇者」

遙か昔に世界を救い、その後も世界を守り続ける象徴。

……が、現在では忘れられつつある。というより覚えられていない。

”現在”の勇者はカンラ。

「魔剣」

最強の武器を創る目的で創られた最凶の武器。

研究所の事故により、その研究は”消滅”し、今や伝承の存在。

どうやら”鞘”も存在するらしい。

間借り勇者

「ふははははははっ！！俺に喧嘩を売ったのがお前らの過ちだあああ！！」

「…………百歩譲っても良心的人間の台詞じゃないってそれ」

魔物を足蹴にして高笑いをする男に、女は輝きのない目線を送り呟いた。

日差しと風が混ざりながら頬を掠める、とある日のこと。

王国オールドル、その一角にある街の西。

街道を離れた場所にいるという少し大型の魔物。

「聞いていたより大きかったけど、まあ、問題なしと」

そういいながら、女は屈んであたりを見渡す。

めぼしいものが無いとわかると、やや顔をゆがめて起き上がる。

「……ち」

「アルマさん、顔がひどいよ」

「カンラの横にいれば問題無し」

「え、それどういうこと？どういうこと？」

「さて。手配された魔物も倒したし、戻りましょうか」

「え、え……え？」

すたすと歩いていくアルマの後ろを、カンラは寂しそうに追いかけた。

「では、少々お待ちください」

「よろしくおねがいます」

書類を記入して提出し、アルマは街場のソファにすわった。

国が運営する機関の一つ、”ハロウ”。

依頼を受けて紹介する、仲介業を主とする機関であり、多くの者が訪れる。

大きな被害を出す魔物の退治手配も、その一つ。

「今回はそこそよかったかな」

「それならまた暫くは大丈夫そうか？」
「……………ええ」

「……………」
「……………」

「え、問題あるのか？」

「……………今月は、あれがありますから
「あれ？」

「これかな……………」

アルマはそう言って耳をふさいで屈んだ。

「ぶほっ」
「……………」

屈んだアルマの頭上を飛び越えて。
華麗に直線を描いた足は、カンラの頭に到達。
そしてそのまま、蹴り飛ばした。

「兎、よっす」

「よっすアルマ。馬鹿はどこ行った」

「君の下にいますけれどー!？」

下からの叫び声に、兎はようやくどけるとずれた眼鏡をかけ
なおした。

見事なことに、周囲に被害は出ていない（下にいる人物を除

いて)。

「何すんだよコノヤロ!？」

「お前が何してくれてんだよ!？ 忘れたのか、馬鹿だから？
!馬鹿だから!？」

大事なことなので二回言いつつ、兎はカンラの頬を引っ張る。
ついでに、カンラも兎の髪を引っ張っている。
ふと、思いついたようにカンラが叫ぶ。

「……ああ!？」

「やっぱり忘れてたのかよおおお!」

本日二度目の蹴りを食らわせ、兎は叫んだ。

一応、周囲に実害は出ていない。
迷惑被害はともかく。

「この前の支払い期限日があるって言ったよな! 何度も言っ
たよな!？」

「何で俺だけ! アルマは!？」

……

「ごめんごめん、うっかり」

「死んだ魚のような目で可愛く言っな!」

わざとらしいほどに効果音までつけながら言ったアルマの頭
を、二人同時にはたいた。

「とにかく、さっきの報酬で何とかなりそう？」

「家賃はな」

「……それはつまり」

「生活費がない」

重い空気が周囲に漂った。

アルマが振り返り、そこにある掲示板を見る。

「仕事配分間違えた……あらかたの仕事はもう取られてるよ」

「あいつが戻れば何とかなるけど……まだまだな、多分」

「……最終手段、しかないな」

神妙に口を開いたカンラに向き直り。

二人は次の言葉を待った。

「……」

「とりあえず仕事が残ってないか探してみよう」

「それしかないか」

「ごめんなさい痛いもう言わないからどいてください痛い」

「なんじゃ、騒がしいのう」

「「うわあ!?!」」

「……びっくりした」

突然近くに現れたその姿に、3人は驚き目を見張る。
それを見て、現れた人物はにやりと笑う。

「レーヴェ、せめて予告してからでてきてくださいよ」

「それじゃあ面白くないじゃろうが」

「お前がだろ!」

「まあまあ……せつかく仕事を持ってきたというに」

「マジですがレーヴェ」

「まじっすか」

「……とりあえず場所を移動しよう。」 “ここ” じゃ何だしの

「ぜひおねがいます」

いまだアルマと兎の下にいるカンラは、震える声でそう告げ

た。

人探し

「家探し？」

(むごむごむごむご)

ストローを加えながら、カンラは肘を突いて尋ねた。
その隣では、アルマがケーキを無言でほおばっている。

「わしの知り合いが暫くここに住む事にしたらしくてな。そ
ういうのはお前達の方が詳しいだろ」

「ああ、レーヴェは放浪してるから」

「アルマ、せめて旅してるといつてくれんか」

(むごむごむご)

「でもさ、家探すくらい別に仕事にするほどでもないんじゃない
ね？」

(むごむご)

半分空になったパフェの皿にスプーンを指しながら、兎が尋
ねた。

隣でアルマがケーキを無言でほおばりながらうなづく。
レーヴェは少し疲れた顔になり、前を指差した。

「……そいつにとっての北じゃ」

() () () “方向音痴”か…… () () ()

「とりあえず家だけでも決まれば、後は何とでもなるじゃろ」
「……了解、その仕事引き受けた！」

カンラはそう叫ぶと、加えていたストローをふっと吐きだした。

「困ってるんなら助けるのが俺の主義だからな！」

「さすが、勇者殿は懐が広い」

「単に考えなしなだけじゃね？」

そう呟いて、兎はパフェに残っていたさくらんぼに手を伸ばした。

すかさず、口に含む。

カンラが。

「テメエ何してくれてんだよおおおお」

「早いもの勝ちじゃああああ」

「で、その人は？」

「……それが、のう？」

困ったように笑うレーヴェの顔に疑問符を浮かべてアルマは首を傾げた。

「……悪いが、既に迷子じゃ」

「というわけで、まずは迷子探しか……」
「迷子、って年でもないんじゃないかの」

街の中心にある公園へとやってきたカンラとアルマ、そして
レーヴェ。

兎には、先に家探しにまわってもらうことにして。

「その人の特徴は？」
「そうだよ、どんな奴かわかんないんじゃない探しようも無いじ
ゃん」

「……一言で言うなら、黒、じゃ」
「くる？」

そう、とレーヴェは頷いた。

「髪も服も、ついでに瞳も真っ黒じゃ。目立つから、探しゃ
すいかもしれん」

「よっしゃ、いっちょ探すか！」

じゃらじゃらと飾りのついたおもそうな衣装に身を包んだ、

銀髪の男と。

行動、見た目とある意味すべてが目立つ男。

「……こっちも大分目立つけどね」

アルマは小さく呟いた。

「？何かしら」

同じ服を着た人々が、多いように見える。

不思議に思った一人が、近くにいた人物に声をかけた。

「あの、何かあったんですか？」

「ん？ああ、何でも事件らしい」

「事件、ですか？」

「まあ騎士団が出てきてるし、直ぐに解決してくれるさ」

同じ服装はどうやら騎士団の制服のようだ。

なるほど、と思いながらそれを眺める。

「一応お嬢さんも気をつけたほうがいいかもな」

「ありがとうございます、そうしますね」

もう少女というような年齢でもないのだが。

それでも身を案じてくれた好意は受け取り、”少女”はお辞儀を返した。

「……たしか、オフィーリア要塞、でしたね」

この街付近にある国の施設の名を思い出し、口元に手を当てて呟いた。

そして、微笑んで歩きだす。

漆黒の髪を、揺らしながら。

「人、多っ!!」

「なんじゃ事件でもあったんかの。ありゃあ騎士団じゃな」

「めんどくさ……」

「アルマ、とりあえず立ち上がれ」

座り込んだカンラとアルマを立ち上げらせながら。レーヴェは見渡して小さく息をはく。

「これじゃあ探し難い上に動きにくいのっ」

国の西側、国の入り口ともされるオフリーリア要塞。
ここには城の騎士団一隊による、強固な警備がなされている。
警備機関に加え、ここ一帯の治安を守っているのだ。

「どうやら、騒がしい連中が入り込んだらしい」

「暴動？」

「そこまじやなさそうじゃが、まあ、面倒ごとには変わり
ないか」

「カンラくらい？」

「そうじゃな」

「え、え、どゆこと？」

「気にするな。それより、どうやって探す？」

三人の間に沈黙が流れる。

「あーもー！！こうなったら片っ端から人を倒していけばい
つかはたどり着く！！」

何にだ。

アルマとレーヴェ同時にそう思ったそのとき。

がし、と、カンラの腕がつかまれた。

続、人探し

「隊長、大声を上げている怪しい奴を連れてきました」

「通せ」

「はっ」

引き連れられたカンラ、その後ろからアルマとレーヴェ。
3人は騎士団につれられ、突き出される。

「ようやくカンラも裁かれるんだ……」

「え、ちよつと待てようやくつて何？何もしてないよ俺？」

「胸に手を当てて考えてみると分かるよ」

「……わかんない」

「わかるんだ……私が」

「お前がか！」

「静かにしろ」

「すみません」

冷たい声音で言われ、二人は同時に頭を下げた。
隊長と呼ばれた男は、その声音のまま淡々と続けた。

「聞くが、この場で何をしていた」
「……人探し」

という名の暴拳にでようとしていたのだが、面倒なことになりそうなのでそこで止める。

「叫ぶ必要があるのか？」

「無いですね」

「え……あれ、俺をかばう気持は？」

「無いですね」

「ねえちよつと!？」

「……」

「「たびたびすみません」」

今度は無言で向けられた冷ややかな視線に、カンラとアルマはまた頭を下げた。

「「こんだけ人が多いと探すのも大変で、それで大声を上げたというわけじゃ」

「なるほどな」

二人の変わりに、レーヴェはいかにもそれらしいことを言うてみせる。

とりあえずは納得したのか、男は思案した後口を開いた。

「なら早くしたほうがいい。この辺りはこれから危険だ」

「……わかった。ほれお前さん達、いくぞ」

「わ」

「レーヴェ？」

背中を押すように、レーヴェに促され。
3人はその場を離れた。

「隊長、よろしいのですか？」

「あれは無関係だ」

男はそう言い切った。

彼らは今追っているものとは違つと、知っていたから。

(しかし、あれは……)

「アリオス・シュトラウス。騎士団部隊長の一人じゃ」

少しはなれたところまで行き、先程の場所を見つめながら。
そう言うレーヴェに、アルマは首をかしげた。

「知りあい？」

「いや。じゃが、結構な有名人じゃからな」

金髪碧眼の整った顔立ちに、白が基調の騎士服。

その実力は若くして隊長を務めるにふさわしく。

現在は、国境であるオフィーリア要塞を任されている。

つまり、この街を実質守っているのが、彼である。

「まあ、向こうがこっちを知つとる可能性はあるが」

「しかたないって。レーヴェもある意味有名かもしれないし」

「……それはお前さん達もじゃろ？」

「それより、急いだ方がいいんじゃないか？」

きよろきよろと見渡しながら、カンラが言う。

いつの間にか、塀の上に立って。

「もうすぐしたら多分捕り物でも始まるぞ」

「え？」

「さっき言ってたろ、”これから”危険だって」

その言葉に、アルマとレーヴェは目を見張る。

”何者か”がここにいることが危険であるのなら、既に危険である。

”これから”と言ったということは、つまりこれから更に何かを起こすということ。

騎士団が行うことは、街を守ること。

つまり、その”何者か”を”これから”捕らえるのだらう。

「面白そうではあるけど……騎士団もいるわけだし」

「……」

「？アルマ、どうした」

「……カンラが頭使った……」

「まあ、飾りじゃなかったということじゃな」
「お前ら、俺をなんだと思ってるんだ……？」

周辺がざわざわとし始める。
人が、次第に数を減らしていった。

騎士団により、できるだけだけの避難が始められているのだろう。

「……カンラの言う通りではあるんじゃないが」

「問題あるのか？」

「あいつ、事件とか好きじゃからのう……自ら進んで巻き込まれにいつてなければいいが」

咳くようにそう言って、空を見上げた。

大きな音が、中心で鳴り響いた。

見上げていた空から、視線を戻す。
先程より人が減ったと入っても、まだ人の数はそれなりにいる。
騎士団も、動き始めていた。

「……なんだか面白そう」

にこやかにそう呟くと。
黒髪を揺らしながら、歩き始める。

”中心”に向かって。

魔女と魔賊

騒ぎがはじまり、穏やかだった周囲の空気が一変した。あちこちで大きな音と揺れが起きる。

「騎士団なんぞに、捕まるワケがないだろオ！」

幾つか現れた人影の中に、ひときわ目立つ姿。

騎士団とは対照的に、黒を基調とした姿。

色こそ黒一色であるものの、造りや飾りの所為で派手に見える衣装。

「……ねえ、あれ」

「違うぞ」

「黒いし目立つけど」

「違う。というかあんな知り合いは謹んで遠慮願おう」

「……魔賊^{マキ}、だね」

魔術の魅力に取り付かれ、崇拜する組織。

機関としては認められていないものの、その規模はそれなりに大きい。

その目標は、”魔女”。

「魔女”に憧れた集団、か……」

「……え、でもあれ男じゃん」

「馬鹿。”魔女”はただの呼び名だよ。馬鹿」

「実際男の”魔女”もいるわけじゃしの」

「それより、わしとしてはあの手にある物が気になる」

恐らく主導者である人物の手にある、古めかしい表紙の分厚い本。

男はその本を開き、高く掲げる。

途端、当たりに不自然な風が巻き起こり、騎士団の足を止めた。

「！魔術……詠唱も媒介も無しに……」

「まさか、というかやはり、というか……あヤツら、伊達に魔女を目指してないのう」

レーヴェは呟くと、顔つきを変えた。

「カンラ、アルマ。悪いが、仕事が増えた」

「大分騒ぎも大きくなってきたな……ここまでは追って来れ
まい……」

「それでもないぞ」

「!!!?」

男の頭上から声が振りかかる。

あわてて見上げた先には、こちらへと落ちてくる人影。

急いで避けるものの、完全にはかわしきれずダメージを受け
る。

「ぐあ!!!?」

「逃げられると思ったのか？残念だったなあ!!!」

「……………」

ははははは、と高笑いと共に武器を振りかざすその様子は、
魔賊の男よりも寧ろ悪役。

アルマはあえて口にはしなかったが、軽くため息をつく。

男は驚いていた表情を不敵な笑みに戻し、尋ねた。

「騎士団、じゃねえなあ……何だ、お前ら？」

「魔女の使いの者だ」

「貴方の持つその本を、回収しに来た、ね」

そう言つて、アルマも杖を前にかざす。

男は堪えきれないように笑い出す。

「……………ククク、お前らごときが”魔女”を名乗るとはなあ…

……?」

「魔女じゃない、魔女の”使い”だ」

「それに、お互い様じゃないの？」

「どっちだろうと、俺の前に出てきたって事は、覚悟はできてるんだろっな？」

そう言うと、男は本を構える。

瞬時に、鋭い風が二人を襲う。

「……アゲインスト！」

詠唱していたアルマが杖をかざすと、襲い掛かる風に対抗する風が吹いた。

相殺された風は、静かな空気へと戻る。

「詠唱なしの魔術……」

「その本の力か」

「そうだ、これこそ我らの目的を叶える手始めとして手に入れた物だ！」

男は本を掲げたからかに笑う。

黒い服の下から覗くその目は、ある意味きらめくように輝いていた。

「うわあ、カンラより悪人面……」

「アルマよりは瞳が輝いてるぞ」

「魔法を使うためではなく、魔法を残すための本、」 魔典書

”

「!？」

る。

振りかかる声の主を探そうと、男は顔を動かそうとする。が、身動き一つとることができず、表情だけを驚愕へと変える。

男とはまさに対照的な、真っ白な人物が、ゆっくりと現れた。

「悪いが、その本は”返して”もらうぞ」

「何だと……？」

「憧れるのは結構じゃが、盗みは良くないということじゃ」

そう言うときレーヴェは指を立て、そして軽く振った。

幽かな光がその軌跡を描く。

とたん、痺れたように男の手は本を掴んでいらなくなつた。

「な……!!？」

「いったただきー」

すかさずカンラがそれを拾い上げ、男から距離を取った。

「体が……魔術か……いや、違う!!？まさか……!!！？」

不敵に微笑むその姿を、男は知っていた。

白い衣装に身を包み。

日の光で白く映る白銀の髪と瞳。

「魔女、”銀昌”……!!！？」

「ほーらレーヴェ有名人」

「あんまり嬉しくないのう……」

アルマの台詞に、”魔女”レーヴェはため息をつきながら答えた。

そして、もう一度男に向き直る。

「さて、本さえ戻ればそれでかまんのだが……一応騎士団がいるからな」

「逃がしたら後々面倒そうだしね」

「……なめるなア！」

叫ぶような声。

男は力をこめて、動かない体を無理に動かした。魔術がはじかれ、レーヴェにそれが跳ね返る。痺れた手をレーヴェは見つめた。

「ほう、中々の精神力じゃ」

「……何か、俺も痺れてきたんだけど……？」

「そりゃあわしの魔術を跳ね返されたからな。安心しろ、わしも痺れとるから」

「私は痺れてないから問題無い」

「俺は!？」

カンラの言葉を聞き流しながら、アルマは男を見た。その様子は、先程よりも”危ない”。

「問題はある、か……」

男が不意に側の壁を殴る。

ばらばらと崩れ去るそこから抜き出した手は、壁についていた鉄パイプを引き剥がした。

「ハ……魔女に会えるとは……オレはツイてるぜエ！……！」

鉄パイプを大きく振りかざし、男は言い放った。
そして、そのまま。

動くことの無い男に、3人は不思議に思う。
が、その理由はすぐに訪れた。

「それはそれは、珍しい方がいらしたものです」

こつ、こつ、と。

足音が、ゆっくりと近づいてくる。

「魔女は不吉の象徴とよく言われますから」

男よりも”黒い”姿の人物は。

不吉に不敵に微笑んだ。

出会い×2

男は動かなくなったまま、ゆっくりとその手から鉄パイプを落とす。

その顔は苦渋を表すが、それを伝える声も出ないようだった。

「申し訳ないけれど、あんまり暴れられると騎士団に見つかっちゃうから」

大人しくしててね、と言って、指を振る。

先程レーヴェがしたのと同じように、その軌跡を光がたどる。

その姿を見て、レーヴェは安堵したように、しかし呆れてため息をついた。

「あらレーヴェ、探したのよ」

「それはこっちの台詞じゃ」

「じゃあ、この人がレーヴェの言った」

「ああ、迷子じゃ」

「あ、ひどい。ちよっと色々と歩き回ってただけよ？」

「それが迷子じゃと言った……と、そうじゃ」

レーヴェがカンラとアルマに向き直る。

「お前さんとお前さんの家を探してくれた人たちじゃ」

「カンラだ、どぞよろしく」

「アルマです」

「はじめまして、ノウラといいます」

ノウラは服のすそを掴んでお辞儀をした。

顔を上げて、二人を見て、そして微笑んだ。

「もうお察ししていらっしゃるかもしれませんが、”魔女”
です」

広場での仕事を終えたのだろう。

小さく騎士団の姿が見え始めていた。

ピリリリリリリリリリ

「はいはい……わかった、じゃ。……家のほうも見つかったって、兎が」

「それじゃあ、さっさとここを離れるか」

「あら、この人放っておいていいの？」

「何言つとる、今ここには騎士団に会いたくない面々しかないじゃろ」

魔女という存在は、騎士団とはあまりいい関係には無い。

存在は感じられるかもしれないが、それでも直接会わないに越したことは無い。

何か”問題”がおきてしまう可能性は、無いほうがいい。

それに。

「……とりあえず場所を変えよう」

「話はそれから、だね」

男を放置したまま、四人はその場を離れた。

「隊長、この男が主犯核のようです」

「身動きは取れないようだが……錠をかけてから運べ」

「はっ」

アリオスはあたりを見渡す。

動かなくなっていた男以外に、人はいない。

また、特にこの場が荒らされた様子も無い。

ただ、男が持っていたはずの”本”は無かった。

恐らく”魔女”により創られたであろう”魔典書”。

アリオスは注意深くあたりを見渡す。

「……………」

「どうしたんです？隊長」

「ギィ……お前はもう少し普通に出て来い」

アリオスの目の前。
近くの柱を使い逆さづりで見れたギイは、笑ってそこから降りた。

「どうだ？」

「もうこの辺りには何も無いですよ」

「そうか……」

「何か気になることが？」

「……いや」

(……得体が知れない、か……)

小さくため息をついて。

アリオスは振り返り、その場を離れた。

「なるほど、レーヴェの幼馴染……」

カップのお茶を飲みながら、アルマはうなづく。
カンラ達の家に、四人そして合流した兎はいた。

「……え、同い年？」

「大体同じですね」

「……幾つになるんだっけ……」

「こら、やめとけって」

指を折って数えだすアルマをカンラが止める。

「指で足りるわけ無いだろ」

「お前も十分失礼だよ！」

兎に殴られ強制的にカンラは黙った。
アルマも諦めたのか手を下げる。

「見た感じだと、私とあまり変わらないんだけど」

「そうじゃの。アルマよりは上か」

「まあ、そういうわけで一人暮らしを始めようかと思ってね」
「どういうわけかはわかんないけどなるほど」

「皆には家まで見つけてもらっちゃって……本当にありがと

う

「気にするな、困ったときはお互い様だ！」

「ほづ、じゃあ今回の件はボランティアということでもいいの

か？

「……それは駄目」「」

「……生活がかかると息が合うの、お前さん達」

「しかし、結構よさそうなところだったなー俺も引越すか

なー

「家賃滞納しておいて何言ってるの？馬鹿なの？」

「兎酷い！俺に対して特に！」

「え、カンラは馬鹿だよ？」

「え、何でアルマが言うの？何で！？」

「いいお友達ね、うらやましい」

三人の様子を身ながら、ノウラは微笑んだ。

「レーヴェがここに居つくのも分かる気がするわ」

それを見て、レーヴェは軽くため息をつく。

「安心せい、今日からお前も仲間入りじゃ」

「……なら、嬉しいかな」

「それより、お前も一応行動には気をつけるよ」

「騎士団のこと？それとも魔賊？」

「どっちも、それ以外にも、じゃ」

その日の夜。

「本日隣に越してきました。これ、よかつたらどうぞ」

用意した菓子折りを差し出しつつ、ノウラは丁寧な頭を下げ

た。

扉を開けて立っていた隣人は、静かにそれを受け取る。

「何分田舎者ですから、ご迷惑をおかけしたらごめんなさい」

「わざわざすまない。こつちも仕事でいない事が多いし、気にしなくていい」

「では、これからよろしくお願いします」

頭を上げて、微笑んだノウラはふと気づいた。

「名前を言っていないませんでしたね。ノウラと申します。」

「アリオスだ」

「これからよろしくお願いしますね、アリオスさん」

「ああ」

こうして、ノウラの新しい生活は始まりを告げた。
様々なものを巻き込んで。

剣とマニアと

「おっさん、新しいの入ってる？」

「おう、その当たりの棚のヤツだな」

指し示された棚に向かい、カンラは眺めた。

置かれた武器はどれも個性豊かなもの。

それぞれに利点も欠点もあった。

「今の武器が多分もう持たないんだよなー……」

「無茶な使い方を続けてりゃあ、そうなるさ」

「いまさらスタイルを変えるのもなあ……」

一つ、剣を手にとって軽く振り回す。

軽く、カンラの手の内できると綺麗に弧を描く。

「……………」

「珍しく真面目な顔してるな」

「うおわ!？」

突然かけられた声に驚き、思わず剣を落とす。

切っ先はカンラの足に触れるか触れないかのところで、床を貫いた。

「……いい切れ味だな」

「ふざけんなよお前！マジでびびったわ！！」

「悪い悪い」

「……てかアンジエ、お前帰ってきてたのか？」

「昨日な……って、そこで区切んな」

そう言って、床に刺さった剣を丁寧に抜く。
そして。

「……………」

「おーいアン、戻ってこーい」

剣を眺めうつとりしたようにため息をつくアンジエリトに、
カンラもため息をついた。

「で、今度はどこまでさまよってたんだ？」

椅子に逆向きに腰掛け、背もたれに顎を着いて、兎が尋ねる。

カンラたちの住むアパートに戻ったカンラたちはそこで昼食
を取っていた。

昼食と言っても、さっき買ってきたサンドイッチなのだが。

「アイオーラにはよってきた。あそこの武器は見た目が綺麗だが実用的じゃないな」

「花咲く観光地で武器あさりかよ……」

「確かに華やかだったな、女性用のレイピアで一つかなり装飾の良いものが……」

「はいはい聞いた聞いた」

話が長くなる前に切るため、兎がサンドイッチを押し付ける。口に含みながら、アンジェリトは続けた。

「大体お前も勇者なら、聖剣の一つくらいは手に入れるよな」
呆れたように言われ、カンラは言葉に詰まった。

誰も覚えていない、いや、知られていないかもしれないが、カンラは勇者だ。

正確に言えば、勇者の”一族”である。

「……だいたい聖剣なんてそう簡単に手に入るもんじゃないだろ」

「勇者のために生まれた武器は、勇者を求めるんだ」

聖剣は、勇者の血を引くもののために”生まれた”剣のことである。

幾つか既に存在が証明されたものや国により回収されたものがある。

強力なため、一般のものが扱うには過ぎた品、とされ、もっぱら”飾り”となっているのだが。

「カンラじゃ勇者には見えないから仕方ないんじゃないかね？」

「……………まあ」

「何だよそれ！というか、アンは聖剣が見ただけだろ」

「何を言うか！見るだけじゃなく触りたいに決まってるだろ」

「！」

「知るか！」

「で、何でまた戻ってきたんだ？もう暫く戻らないと思ってたけど」

最後のサンドイッチを手にとりながら、兎が尋ねた。
すると、アンジェリトは少々真面目顔になる。

「ああ、ちょっと噂を聞いたんでね」

「噂？」

「魔剣がこの町に来るってな」

聖剣と魔剣

はじまりは、”最強”の剣を生むことだった。

ごく自然に生まれるとされる聖剣には、いまだ解明されない謎が多い。

また、いつどこでどうやって、生まれてくるかも分からない。

そこで、人々は考えた。

だったら、自分達で生めばいいのだと。

聖剣などに使われた素材と、それを鍛えるだけの技術。

そうして生み出された、人の手による聖剣。

しかし、物事と言うものは、そう単純でも簡単でもなかった。

”最強”を求めた結果は、”最凶”。

暴走した魔剣により、研究所はそこで働くものを含めて壊滅。そして、魔剣も姿を消した。

「そして、今も何処かで彷徨いつづけている」

「……………」

「専門外だから、あまり詳しくないんだけど」

剣の製造には、魔術も用いられているとされている。

しかし、製造に魔女そのものは関わっては居ない。

古いにしえから魔術を伝えてきた魔女にとって、魔剣創造は好ましくはなかったのだろう。

そして、魔剣の製造者側にとっても、魔女の存在は好ましくなかった。

「ごめんね、あまり参考にならなくて」

「ううん、十分です。こっちは全く無知識だったわけだから

……」

謝るノウラに、アルマは手を振って答える。

本来なら、こちらこそ知っていなければならぬことなのに、と。

”勇者のために創られた”魔剣の話なのに。

勇者と行動をとりにしている彼女は、小さくため息をつく。

「だから、ありがとう」

「……ふふ」

「ノウラ？」

「最近魔剣の噂を聞いたから、気になったんでしよう？カン

ラ君のこと」

「まあ、カンラが居ないと困りますから」

「私は魔術師で、彼は壁……もとい、前衛だから」

「……なるほど」

言い換えはしたがきっぱりと言ったアルマに、ノウラはやや苦笑いをこぼした。

魔術師は、（アルマの場合もそうかはまあ別として）基本肉弾戦に弱い。

また、詠唱中には無防備になってしまう。
一人での活動には、あまり向かない職業なのだ。

「レーヴェは一人でも大丈夫みたいだけど」

「まあ、彼も魔女だから。普通の人よりは元が頑丈だからか

しら」

「私も鍛えようかな……」

「アルマちゃんは十分強いと私は思うけど……」

「というわけで、カンラを借りにきたんだ」

「ああ、どうぞどうぞぞ」

「え、あれ、兔さん？」

アンジェリトの申し出に、兔はカンラの背中を押す。
カンラは立ち上がり、慌ててそこから離れた。

「いや、何で!?!?」

「もし本当に魔剣が近くにあるなら、多分勇者をもつ……つれてけば反応すると思うんだ」

「今持つてくつて言おうとした？俺のこと物扱いした？」

「もつてけもつてけ、在つても邪魔だから」

「酷い！？」

「とーにーかーく！俺は魔剣をさわりたい……探したいんだ！」

「魔剣があるかもしれないことでもう本音が隠せてないな」

「いつちやえよ、魔剣を見て触つて抱きしめたいんだろ？そうなんだろ？」

「その通りだよー！」

アンジェリトの迷いのない言葉に、二人はため息をつく。

しかし、カンラ自身も魔剣に興味がまったく無いわけでもなかった。

「……とりあえず、アルマが帰つてきてからな」

「そういえば、まだ帰つてこないな」

兎はそう言つて部屋の時計を見る。

針は、アルマが出かけてから三周を過ぎたところにあつた。

「……………」

棚に置かれた一つの剣を手にとり、見つめる人物。
目立たない黒い布で覆った姿は、店内で浮いていた。
武器屋の店主が、その姿に声をかける。

「お、兄さんそれ買つかい？」

「いや……俺には必要ない」

そう言つて、手にした物をおいて、店を去る。

先程まで手に取られていた武器を見て、店主はため息をついた。

「今日はお前、売れないな」

「……近い、な」

黒に包まれた人物は、街を歩く。

上を見るでもなく、下を見るでもなく。

ただ、何かをみすえて。

「この町に、在る」

男は歩いていく。

周囲にある物の存在も感じないように、目もくねらず。

ただ、一つだけを探して。

聞こえた

(……魔剣……)

数分前に、ノウラの家を出て。

アルマは足元を見ながら道を歩いていた。

人々が求めた末に作られた魔剣。

求められたのは、強大な力。

その力は、何かをするために。

(力がなければ、何もできない、か……)

アルマは暫く自分の掌を見つめていたが、ふと、ため息をついた。

考えるのも疲れたのか、頭を振りかぶる。

「帰ろう……そして寝よう」

ふと、視界が薄暗くなり、アルマは足を止めた。

前には人が居て、それが作る影が、アルマを覆っていた。

「……………」

「？」

「……………勇者」

「！」

ほんの、一瞬の出来事だった。

瞬きの間ほどの時間で、その場の景色は変わっていた。

その眩きが聞こえたアルマは、僅かな反応を見せ、その場を跳び退けていた。

離れた場所からその場を見て、顔をしかめる。
舗装された道は、深く抉れていた。

「……………何するんですか、いきなり」
「……………」

黒い、服、と言うよりも布を纏った人物は、答えない。
以前見た魔賊と少し似ていたが、違つとアルマは確実に言え

持っている、気が違う。

「感じる……………勇者の気配だ」
「……………残念だけど、私は勇者じゃないですよ」
「だろっな」

その言葉に疑問を感じながらも、アルマは隙をつかがって

幸い、街中からは離れていたため、周囲の被害は気にすることはない。

しかし、そのためここには”壁”がないのだ。
アルマが術を放つための時間を稼ぐ壁が。

相手は不明だが、少なくとも大きな物理攻撃力を持つことは、
地面の跡から間違いない。

ただ、その姿から、どうやったのかが見えてこないのだ。

ここで相手と戦うことは、賢くないとアルマは判断した。
とにかく、一度逃げることを考えなければならない。

「分かっているなら、さっさと勇者のところにも行ったら
どうですか」

「知っているな」

「！」

「お前は、勇者を知っている」

アルマの体が一瞬震える。

相手の様子に、怯んだのだ。

突然に変わったわけではない。

今まで、表に出ていなかっただけ。

あふれ出したその殺気にも似た感覚に、アルマの体が反応し
たのだった。

「……………」

一瞬にしてアルマを覆ったそれ、逃げるといふ考えを増大させながらも取り消させた。

逃げなければ危ない。

このまま逃げてはいけない。

それとも、はたして逃げられるのか。

相手が探している勇者は、間違いなくカンラ。

しかし、気配を感じても居場所まではまだ分かっていないのだらう。

そして、偶然カンラと近しいアルマを見つけた。

「お前が居場所を吐くか、それとも」

「え」

目の前から消えた姿に、思わず声を出して驚く。次の瞬間。

「お前が消えれば、現れるか？」

アルマの顔のすぐ下で、見上げながら男は笑った。

「アルマの奴、何処行つたんだ？」

あたりを見渡しながら、アンジェリトはため息をついた。魔剣探しにカンラを”借りる”為アルマの許可がもらいたいの、そのアルマが帰ってこない。

そこで、カンラと二人、出向いていくことにしたのであった。

「出かけるとき場所は行つてなかったのか？」

「ああ、それなら」

『ちよつと出かけてきます』

『ああ、何処行くんだ？』

『輝かしい未来まで』

「……………だつて」

「……………」

なんとも言えずに二人は黙つて、また歩いていく。

「……………にしても遅いだろ。アルマが一人で出かけることって良くあるのか？」

「まあ、仕事の依頼確認とか買出しでは在るけど……………こんなに長いのは珍しいな」

基本はカンラと行動をともにしているアルマ。

後衛職業でも在るので、一人で街の外等へ出歩いたりはしない。

「この辺に居なかつたら、ノウラのところにも……………」

思いついた行き先を提案しようとした、その時。

「……………」

「カンラ、どうした？」

突然言葉を止めたカンラに、アンジェリトは不思議そうに顔を覗き込む。

カンラ自身もまた、不思議そうにしていた。

「いや、何か……………」

言いよつの無い感覚に、震えるように小さく体を動かす。

「誰かに呼ばれたような気がしたんだけど……………」

その後で。

遠くのほうで、大きな音がしたのが、小さくカンラの耳に聞こえた。

魔剣、邂逅

ぼたり

口元をつたい、赤く黒く滴り、地に落ちる。
睨み付けるように、アルマは前を向いた。

「…………ち」

腹部に染みる赤は、抑えても無駄だということように止まらない。

「フン…………魔術師か」

マントの下から現れた灰色の瞳が、射抜くようにアルマを見た。
同じく灰色の髪は、乱れたようになびく。

（至近距離での魔力暴発でもあの傷…………それに）

「少しは、楽しめそうだな？」

（無い…………武器が、無い…………！？）

確かに、素手ではなく武器による攻撃を受けた。

なのに、男は何も手にしていないし、隠した様子も無い。

「次はどうかわす？」

「！」

武器は持っていないが、構えた男の姿を見てアルマはすかさず手を前に出した。

大きな力がぶつかり合い、勢いが生まれる。

そして、周囲一帯をなぎ払うように大きな振動。

(剣圧なのは間違いない、けど……これは……)

さつきより傷の増えた体を抑えながら、前を見据える。

怖いほどの笑みを浮かべた男は、そこに立っている。

詠唱時間を稼げないアルマにできることは、魔力を暴発させて攻撃の直撃を防ぐこと。

自身も巻き込むその技で、身体はもう既に限界が近い。

だが、一つ分かったこともある。

男がとどめのために手を振り上げる。

アルマは、息を切らせながらただそれを見つめていた。

「どうやら、もう駄目のようだな」

「……ふふっ」

「どうした？自分の状況に笑えてきたか？」

「いいえ……随分と、不思議な御方を見たものだと思いますし

て」

「……………」

男は、ぴくりと反応して動きを止める。
しかし、すぐに元に戻り。

振り上げた手を、下ろした。

(……………)

構えたものの襲ってこない痛みにも、アルマは閉じていた目を
開ける。

目の前に移ったのは、見覚えの在る黒いものと、こちらを見
つめる赤い瞳。

「大丈夫か？」

「……………」

「アルマ？」

「……………とりあえず、離れる」

「……………え……………この場面で……………？」

アルマを抱きかかえたまま、カンラは苦い表情を浮かべた。
気にせずに、アルマはため息をつく。

「……………起こして、あとで」

「……………了解」

意識を手放す、要約すると”疲れたので寝る”と言ったアルマを、近くに降ろして。

その体中に在る傷を見て、ぎゅっと唇をかむ。

カンラは、先程までアルマと対峙し、その手を振り下ろしていた男と向かい合った。

「俺が代わる。それでいいだろ？」

まっすぐな目を向けられ、男は暫く黙っていた。が、口の端をゆっくりと挙げる。

ニツケタ

「!!……お前」

「勇者、だな」

「……そうだけど」

「お前を、探していた」

男は笑みを浮かべて、カンラに”刃”を向けた。

「くっ!!!？」

素早く抜いた剣でカンラは斬撃を受け止める。

が、その勢いの強さに引きずるように後退した。

「お前……!!？」

「俺はお前を探していた。”それしかなかった”からだ」

「？」

「世界に忘れられるのは、どんな気持だ？」
「！！！！」

カンラの元に、二撃目が訪れる。
今度は受け止めずに、飛んでかわした。

しかし。

「ぐ……」

かわした先に、三撃目が待ち構えていた。
上手く受け止められずに、剣ごとカンラは吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。

「く、そ……」

薄く開いた視界の中に、たたずむ人影と、薄く光る大きな刃。

「！」

「！？」

不意に、周囲に煙が巻き起こった。

白い靄は一瞬にしてあたりを包み込み、全てを覆い隠した。

「カンラ！」

「アン！？これ、お前か？」

「目くらましだ、長くはもたない。行くぞ！」

小声ながらもせかしながら、アンジェリトはカンラを起こす。

先に拾ってきたのか、背中にはアルマを抱えていた。

「待、おい……!?!?」

「場所が悪い、分が悪い、何より相手が悪い!」

そう言っつて、アンジェリトはカンラが対峙していた男がいる
だろっ方を見た。

煙で姿は見えないものの、そこに”在る”と、確実に分かる。

「……何しろ相手は、最強の”魔剣”だ」

「!?!……やっぱり、か」

アルマが気づいたこと。

そして、カンラが見たもの。

男自身が”刃”となっている、その姿。

「とにかく!一旦引く。それに……アルマがまずい」

アルマの顔色は普段よりも薄く、白く見えた。

腹部の傷は中々に深いらしい。

「……分かった」

白い煙とともに、カンラたちはその場を離れた。

武器と人と

掌からこぼれる淡い光が、アルマの腹部を照らす。
次第に、あふれた赤は和らぎ、同時にアルマの顔色も色味を
取り戻してきた。

「……………これで大丈夫だ」

ふう、と息をついた兎はかざしていた手を下ろした。
ほっとして、カンラとアンジェリトはアルマの顔を見る。
どうやら眠っているらしく、規則正しい呼吸をしていた。

「傷は深くなかったけど出血が多かったからな。アンの判断
は正しかったぞ」

「俺もカンラも、治療術は使えないからな」

「……………そういえば、兎、回復役だったっけ……………」

「ああ、俺もすっかり忘れてたわ……………最近は特に怪我也無か
ったしな……………」

苦い笑みを浮かべながら、兎はため息をついた。

「で？その久々の怪我の原因は何なわけ？」

「……………魔剣、だよ」

「お前が言ってた、あの？」

アンジェリトはこくりと頷く。
カンラも、考えるようにやや下を向いた。

「噂程度には耳にしてたけど、まさか本当に”生きてる”とはな
はな
はな」

「生きてるって……どういうことだ？」

「……お前ら、強い武器の条件って、知ってるか？」

アンジェリトの問いに、カンラと兎は互いに顔を見合わせる。

「そりゃあ、武器の攻撃力とか」

「使いやすさじゃないか？」

「まあ、それもそうなんだが……」

少し間をおいて、アンジェリトは言った。

「使い手、だよ」

「「!!」「」

どんなに強く、どんなに使いやすい武器だとしても。

それを扱うのは、結局人である。

どんなに強力な武器を持っていても、それを振るえなければ
意味は無い。

どんなに強力な武器をもっていて、当たらなければ何とい
うことも無い。

聖剣が、勇者の為のものだといわれている所以も、それ。

普通の人では、扱うことすらできない武器なのだ。

「分かるだろ？最強の剣を創るために必要になったのは、最強の使い手、だ」

「……………見失ったか」

煙が晴れた後。

既にその場から離れていた勇者の気配を探ることはできなかつた。

街にあるタワーの頂上から、見下ろす。

人の流れる様子が小さく見える。

そこから聞こえてくる、賑やかな声も。

暗くなってきたからか、あまりに高い場所にいるからか、気づくものは居ない。

男は、闇に溶けるように姿を消した。

今となつては殆ど知られてない、魔剣を創っていた研究施設での大事故。

殆どの研究員と研究成果は、そこで消えていった。

「魔剣の暴走、か？」

「恐らく。創ったはいいけど、その意思制御は考えてなかったみたいだね」

「でも、そんな大事、何で誰も知らないんだ？」

「元々裏で行われていたことだったし……何より、非人道的だからな。公にしなくなかったんだろ」

しかも、終わりの原因が、自分たちが創つてたものである。国としても、あまり表立っていえたことではなかったのだから。

「で、そのときに消滅したと思われていた魔剣が、実は生きてさまよっていた、ってわけだ」

俺も信じてなかったけど、とアンジェリトは付け加える。

生きた武器と言つのも、いまだに信じがたいことなのだろう。

「……それが何で、アルマを襲うのさ？」

今までだって、魔剣は生きていたはず。

しかし、魔剣による事件など、起きてはいない。

少なくとも、一般に知れ渡るような形では。

「それは……」

アンジェリトは口ごもる。

恐らく、あの場で魔剣の言っていたことが聞こえていたのだらう。

代わりに続けるように、カンラが口を開いた。

「俺、だよ」

魔剣の中には、聖剣を創る素材が含まれている。

聖剣は、勇者のために生まれるもの。

創られた中でもあった、ただ一つのしつかりとした記憶。

勇者を、求めてきたのだ。

その目的は、どうであれ。

「俺を探してここに来て……俺とつながりの在るアルマを、先に見つけて」

攻撃した。

カンラは眠るアルマの方を見た。

深く眠っているのか、目を覚ます気配は無い。

『世界に忘れられるのは、どんな気持だ？』

「……お前は今、どんな気持なんだろうな」

そう、小さく呟いた。

「兎、のど渴いた」

「俺にとれってか」

腹部を押さえてじと目をしてみせるアルマに、兎はため息をつきながら立ち上がった。

それを見て、レーヴェはくく、と喉を鳴らして笑う。

「意外と元気そうじゃな、安心したぞ。見舞いの品は必要なかったか？」

「ありがたく頂きます」

レーヴェが差し出す果物の詰め合わせを、アルマはしっかりと握りしめた。

笑いながらも、レーヴェはアルマの様子を眺める。

あれから一週間は過ぎた。

外見の傷は殆どなくなっており、見た目と態度は回復済みである。

しかし、腹部に受けた傷はまだ完治していないのか、ベッドに腰掛けたまま動こうとはしない。

兎もなるべく彼女が動かないようにと気遣っている。

「レーヴェ？」

「いや、何でもない。カンラはどうした？」

「アンとお仕事だつて」

店をでたところで、カンラは大きく伸びをした。

隣では、包みを大事そうに抱え微笑むアンジェリト。

「……はあ……」

甘いため息をついたアンジェリトに、カンラは苦いため息をこぼす。

武器屋に行くこんな感じになるのは分かっていたけれども、買った武器をいつまでも抱えられては困る。

「ほら、行くぞー!!」

「えー」

「えー、じゃねえ! やめろ! 何か俺が真面目みたいじゃん!」

「それはいいことなんじゃないかなあ……?」

聞こえてきた声は、困ったようだが穏やかに。

微笑んだノウラの姿が、明るい街に目立つように黒を添えた。

「こんにちはカンラ君、お出かけ？」

「ノウラか……まあ、そんなところだ」

「魔剣を探しに？」

驚いた二人に、あどけなさを残す顔が大人びた笑みを浮かべる。

その不思議な印象に、カンラとアンはしばし見入るようにつめた。

はっとして、アンが尋ねる。

「何で分かったんだ？」

「んー、アルマちゃん、かな」

先日アルマが魔剣のことを聞きに来て、その後直ぐに怪我をした。

それだけで、何となくの事態は察することができた。

そして、それからカンラが動いたとなれば。

ね、と微笑むノウラに、カンラはお見事、と軽く両手を上げるしぐさをする。

のんびりとして見える彼女も、齢不詳の”魔女”。

そして、曲者レーヴェと古い付き合いが在るのだ。

「……でも一つだけ訂正させてもらおうと」

「？」

「探すんじゃないくて、会いに、いつてくる」

そう言って、カメラはにやりと笑った。

生きる目的

「よお、文字通り”高みの見物”か？」

街はずれの高台にて、カンラは見覚え在る後姿に声をかける。
振り返った男は、カンラを見ても眉一つ動かさない。

(ま、読まれてた、か)

少し離れて、アンジェリトは様子を見ていた。
伝説ランクの武器をすっかり観察したいという気持もあった。
それに、今回は”付き添いだけ”と、約束をしたから。

魔剣は振り返り、右手を掲げ刃へと変えた。

「っと、ちょっと待て！お前の目的は結局俺と戦うことなのか？」

「……正確には違う」

「お前自身が、目的だ」

言い放つと同時に、魔剣は刃を振りかざした。
襲い来る斬撃は、カンラの手元で方向を変える。

カンラが同じく斬撃により、斬撃を曲げたのだった。

「さっすが俺、勇者様、人気者？」

「ちっ！」

軽口を叩きながらも、踏み込んで今度はカンラが仕掛ける。

魔剣は瞬時に左腕も刃へと変え、受け止めた。

感心したように、思わずアンジェリトは口笛を吹いた。

体が刃だということは、攻撃だけでなく防御にも使える。

そして。

「げ」

嫌な顔をしたカンラに向かい、刃の”蹴り”が飛んできた。間一髪でかわすものの、頬を掠めてそこから薄く赤がにじみ出る。

「お前ピリピリしすぎじゃね？もっと気楽に行かないと疲れるぜっ。」

「嫌い……お前に何が分かる」

「勝手に創っておいて、勝手に消そうとしやがって」「！」

やはり、と、アンジェリトは魔剣を見た。

研究施設を破壊したのは、魔剣である。

けれど、きっかけは。

距離を取って、カンラはふうと息を吐いた。

そして、魔剣を見据える。

「まだ、答えてなかったな」

『人に忘れられるのは、どんな気持だ？』

勇者として、人のために生きてきて、次第に、人から忘れ去られていく。

人の為、が生まれる目的だとしたら、消えるときも人によるものなのだから。

(似てるんだ。だから)

だから、魔剣はあんな質問をしたのだろう。カンラは顔を上げて、魔剣を見た。

ずっと、人を救うという使命を持って生きてきた。しかし、魔王も居ない、昔と比べて比較的安全な世界。勇者が、必要の無い世界。

ふと、気がつく。

『あれ、俺今自由じゃね？』

「そう考えたら、楽しくなってきた」

「は……？」

「だってそうだろ？俺が俺として生きていく、始まりだぜ？」

カンラはにこりと笑った。
心から楽しい、というように。

「生まれた目的とか、理由とか、そんな大層なもん、知らないけど」

もしかしたら誰にでも在るのかもしれないし、無いのかもしれない。

でも、そんなことは関係ないのだ。

「お前がどう生きたいか、どう生きるかは、”これから”決めるんだ」

あまりに明るく、はっきりとした答え。

それは予想していなかったのか、魔剣は明らかに動揺していた。

カンラは、揺れる魔剣の 男の目を、真っ直ぐ射抜いた。

「じゃあ今度はこっちから質問な」

「お前、これからどうしたい？」

「俺、は」

急にカンラの様に考えることはできない。

しかし、今生きているのは少なくとも、消えたくなかったから。

どうしたい？

男は顔に手を当てて、苦渋の表情を浮かべた。
それを見て、カンラは一人ニヤリと笑みを浮かべ。

「隙ありいいいい！！！」

啞然とした空気の中、攻撃をうけて男は膝をつき、カンラはそれを見下ろす。

その出来事に、アンジェリトもついていけなかったのか口をあけて固まる。

「ふははははっ！戦いの最中だということを忘れていたか！！」

「ちょ、今の状況でそれ！？なんかいい感じにまとまりそうだったじゃん！？」

「戦いとはどちらかが倒れるまで行われる、そういうものだ……」

「無駄に格好つけんな！お前本当に勇者か！」「勇者だ！」

ははははは、とカンラは高く笑い声を上げる。

さながら、悪役の様に。

「……………ぐ」

「まあ、勝手に劊つといて勝手に無かったことにされるのはイラっとするけどね」

ゆっくりと起き上がる男にカンラは向かう。

先程とはまた違った笑みを浮かべて。

「 ” それ ” はアルマの分な。覚えとけよ」

「……………」

「あとさ、お前せつかく最強なんだから、世界征服でもしてみるか？」

そしたら、また相手してやるよ、と言って。

差し出された手を無視して、男は立ち上がる。

「……………お前に執着することが馬鹿馬鹿しくなった」

「え」

「お前に関わるのはやめる……………俺が、決めた」

「それがいい、ぜひそうしたほうがいい」

「え……………え……………」

呟くカンラも無視して、男はさつさと歩き出す。

まるで、さつきまで何も無かったかのように、前を見て。

「あ、おい……………！……………お前、名前あるのか！？」

去り行く姿に向けて、カンラは叫んだ。

男は足を止める。

「覚えといてやるからさ、俺が」

「……………遠慮する」

「え……………」

その言葉に少し落ち込んだ様子のカンラを見て。

満足したように、見えないくらい少しだけ口の端を挙げて。

「クラウドス、研究時の呼び名だがな」

そのまま、また歩き出した。

真っ直ぐ、前へと。

起爆

鼻歌まじりに足取り軽く歩きたびに、その漆黒の髪が揺れる。昼間の中、まるで夜の様な彼女は、階段を上ったところで足を止めた。

「……………」

アパートの自分の部屋の前。
足元に、小さな小箱が一つ、置かれていた。

「…………えっと、申し訳ありません」

室内に大きく開いた穴を見つめながら。
申し訳なく苦笑いを浮かべつつ、ノウラは頭を下げた。

「気にするな、お前の所為ではないだろう」
「いえ、でも…………私の不注意でお家が……………」

最近出没している、爆弾魔。

街中や民家にまで、いたるところに小さめの爆弾を置き回っては爆発させる。

人的な被害は少ないものの、物的被害はかなりのものになっていた。

ノウラの部屋の前においてあったのも、それ。

しかしノウラがそれを室内に持ち込んで爆破させてしまった為に。

部屋の中はぼろぼろ、壁が壊れて隣のアリオスの家まで被害を広げていた。

「修理屋さんも暫くは忙しそうですし……暫くこのままです

ね

「仕方ない、町中で被害が起きている……こちらのほうが申し訳ない」

寧ろ自分にこそ責任を感じ、ため息をつく。

騎士団であるアリオスは、現在その爆弾魔を追っている最中。しかし、中々証拠も残さない為に、いまだ野放しの状態であ

った。

ノウラがアリオスの素性を知ったのは、引越し後暫くしてから。

街の情報収集の一環の中で、であった。

もちろん、ノウラの素性は明かしていない。

「暫くは俺の家で良ければ、自由に使ってくれ」

「いえ、そういうわけには」

「このままでは生活もできないぞ」

アリオスの方は壁のみの被害であったが。

ノウラの部屋は、水周りは殆ど使えなくなっていた。

「俺は家にいる時間も少ないから、気にしなくていい」

「でも……あ！」

思いついて、ノウラは輝く笑顔を浮かべた。

「では、家の中のお仕事を私が引きつけますね」

「は？」

「掃除とか洗濯とか料理とかなら手伝えます。アリオスさんもお仕事に集中できますし」

「いや、そういうわけには……」

「じゃあ、とりあえず掃除から済ませますね。瓦礫くらいは片付けないと」

アリオスの言葉も半分に、ノウラは早速散らかった、というより荒れた部屋を片付け始めた。

ノウラの雰囲気押し切られてしまったが、断ろうにも有無を言わさぬ様子。

それに、元々申し出たのは自分の方である。

アリオスはまた、ため息をついた。

ばたん

扉が開き、閉まったかと思うと。

重たい空気が部屋の中に訪れた。

座って剣の手入れをしていたカンラは、手を止めて顔を上げる。

「……アルマ？」

暗い雰囲気を負い、何時もよりもやる気を感じられない姿に、不思議に思う。

カンラの声に、アルマは口を開いた。

「……やられた」

「何が？」

「仕事、つぶされた」

「……っええ！！？」

アルマの言葉に、カンラは持っていた剣を落としそうになるほどの声を上げた。

アルマも咎めはせずに、更に顔色を悪くさせる。

そう、このままではまた、稼ぎが今月分の家賃に足りてないのだ。

「何で！？どして！？」

「爆弾が……」

「爆弾！？お前魔道書解読の手伝いに行ってたんじゃないかっ
たっけ！？」

魔術師は、魔術を使う為に魔道書を読めるようにならなければならぬ。

そのため、魔道書の翻訳や解読といったことも専門としているのだ。

今回アルマは、街の図書館の依頼で出向いていたはずである。

「図書館が、爆弾魔にやられた。その所為で図書館も魔道書も……仕事も」

「……そりゃあ」

ぼろぼろだ、と。

口元からはもう乾いた笑みしか浮かんでこなかった。

「……どうするか……もう5日もないぜ……」

「こんなときに兎もアンも居ないなんて……」

数日前に遠出した同居人たちを思いながら。

二人は同時にため息をついた。

「なんじゃ、重たい空気なんぞひろげおって」

重い空気の中を軽やかに舞う銀。

飾りをしゃらりとならしながら、レーヴェは窓辺に座っていた。

「どうぞおかえりください……今お客をもてなすなんてとてもできませんので……」

「……本当にどうした、大丈夫かお前達」

「大丈夫、もうすぐ勇者が路頭に迷う様を見れるだけだから」

「……大丈夫じゃないのう、いろいろと」

「しかしそれなら、頼むのはやめておく……うお!?!」

窓から去ろうとするレーヴェの服のすそを、二人が同時に掴んだ。

反動で落ちそうになり、慌ててレーヴェは振り返る。

「危ないじゃろうが!?!」

「仕事!? 仕事ですか仕事だよ仕事ですね!?!」

「レーヴェ本当空気読めるね、さすが伊達に年食ってないね」

「カンラは落ち着け、アルマはとりあえず年長者に謝れ」

「で、何の仕事?」

「ああ、最近お騒がせの爆弾魔の……?」

途端に大人しくなる。

不思議に思い、レーヴェは二人の顔を見て、驚いた。

「ふ……ふふ……」

「そうか……そうだな……」

「人の生活脅かしてくれた礼は、直接しなきゃあなあ!?!」

「いつも」の如く、高らかに笑い声を上げるカンラ。

いつもなら突っ込むアルマまで、同調して妖しい笑みを浮かべている。

(追い詰められると、人は恐ろしいのう)

レ・ヴェエの小さなため息は、誰にも聞こえていなかった。

共同作業

「どうだった？」

「ダメ。少なくとも爆弾の造りは分かったけど」

そう言って、壁に寄りかかっていたギイはアリオスに紙の束を渡す。

これまでの調査状況が細かく記されたそれをめくりつつ、アリオスはため息をついた。

「ギイ、お前はこれを研究室に回せ。探知機制作を早くしてもらえるようになる」

「了解」

「アレクス班はこのまま街中巡回、ロドリー班は被害状況の調査」

「は！」

敬礼し、部屋を出て行く姿を見送り、また息を吐く。

今のところ分かっているのは、爆弾は確実にその手のものが作っていること。

しかしそれ以外は、まったくと言っていいほど無差別であった。

「頑張りすぎはよくないって、また口うるさく言われるぜ？」

「そうだな……」

「悪かったわね、口うるさくて」

扉をあけて立っていた女性が、少し不満げにそう言った。まずい、と苦笑いを浮かべてギイが姿勢を整える。

「エヴァ姐さん、いたんですか」

「居たら悪い？」

「滅相も無いです」

「すまないな、そっちはどうだった？」

「駄目、外には何も無かったわ」

アリオスの元へ近づき、エヴァはそう言ってため息をつく。

「ごめんなさい、応援に来たのにたいしたことまでできなくて」

「いや、十分助かっている。こっちこそ、わざわざすまない

な

「そうそう、若手新鋭、世の女性の憧れエヴァ・アスターが来てくれたんだから、十分ですって」

アリオスと同期で同じく部隊長を務めるエヴァ。

騎士団の中にも、女性はいるが割合は少ない。

その中でも、部隊長という位置にいる彼女は有名人である。

「うちの部隊は引き続き外部から調査を進めるわ」

「ああ、頼んだ」

「それより、今日はもう帰るんでしょうね？」

呆れたように、少し怒ったようにエヴァは言った。

腰に手を当てた様子は、さながら母親の様に。

「部隊長なんだから、無茶ばかりはできないのよ?」

その昔。

アリオスもエヴァもまだ新米だった頃。

仕事詰めにより無茶をしたアリオスが、倒れたことがあった。エヴァが問い詰めたところ、睡眠も食事もなくに取っついていなかったらしい。

「大丈夫なんでしょうね?」

「……最近は、問題無い」

「おかえりなさい、丁度食事の準備が終わったところですよ」

鍋をかき混ぜる手を止めて振り返ると、ノウラは微笑んだ。辺りには温かな空気と、香が漂う。

「今日はシチューにしてみました。夜は少し冷えますから」

上着を脱ぎながら、アリオスはテーブルに並ぶ料理を見る。家事ならできる、と本人が言っていた通り、料理も得意らし

い。

温かなシチューに加え、他にも幾つかの皿が並んでいたが、どれもおいしそうである。

ノウラの部屋が壊れてから数日。

今日もこうして、ノウラはアリオスの分まで家事を引き受けていた。

その為もあってかアリオスは”最近”食事や睡眠をしっかりと取れている。

「毎回悪いな」

「いえ、こちらこそお家を貸してもらってるんですから」

「いつもですけど、お仕事大変そうですね」

「まあ、今は特にな」

食事を口に含みつつ、既に馴れた雑談を交わす。

「すまないな、早くに捕まればお前の部屋も巻き込まれず
すんだ」

「いえ、私の部屋は私の不注意の所為ですし……それよりも
？」

「大抵は、人気の無い場所ばかりを狙うんですよね
「そうだな」

ノウラの家という例外はあったものの。

今まで被害にあった場所は、路地裏や人気の無い角であったり。

また、人の居ない時間帯であったり。

「じゃあきつと、目的は破壊ではなく、何かを伝えるため」
ノウラの言葉に、アリオスは手を止める。

「少なくとも、無駄に被害を広げたいわけではなさそうです
ね」

「……なるほど」

それなら、人的な被害はあまり広げずに澄むだろう。
しかし、もし目的が何か他の目的の為であるならば。
やはり速めに食い止めるに越したことは無い。

「……何処かの機関に目星をつけてみるか……」
「きつと魔賊では無いですね」

微笑んで言い放ったノウラに、若干呆れながらアリオスはた
め息をついた。

少なくとも、今回用いられている爆弾には、魔術は用いられ
ていない点からもそういえる。

加えて、魔賊は”知恵のある”機関とは言い難い。

とはいっても、こうはつきり言われると、少し不憫に思わな
いことも無かった。

「大体は分かった」

渡された資料を読み終え、アルマが顔を上げる。

「データを下に、爆弾の探知くらいならできそう」

「さすがじゃ。探索魔術は魔術師の特権じゃからのう」

「そうなの？」

カンラが不思議そうに尋ねると、アルマが呆れたようにため息をついた。

「確かに魔術の殆どは魔女によってもたらされたものだけど、魔術師だってそれに魔術に通じてはいるんだよ」

「……ええと」

「魔女じゃなくても魔術を創ることもできる、ということじゃ。探知魔術や治癒魔術とかじゃな」

アルマの説明に首を傾げるカンラに、レーヴェが付け加えて説明した。

何となく分かったのか、カンラはうなづく。

しかし、ふと疑問に思いまた尋ねた。

「治癒魔術も？」

「ああ……魔女には本来必要がないからのう」

「元の生命力や回復力があるし、薬草に関するプロでもあるし」

「まあ、覚えれば使えはするが」

もっとも、魔女がそれらの魔法を覚えることは殆ど無いとさ

れる。

魔女には魔女の誇りや考えが在る、ということだろう。

それにしても、とアルマが口を開く。

「こっちに仕事が回ってきたってことは、騎士団も手こずってるんだね」

「そうらしい。他所から応援をつれてくるくらいじゃからな」

「でも、何でレーヴェが爆弾？」

どうして調べるのか、という問いに。

レーヴェは何時もの様に笑って見せるだけだった。

十字の鉄槌

「……見つけた」

屈んで覗き込んだ先に見つけた小箱を、そっと掴んで引き出す。

透明な光でそれを包み込む。

「……はい」

「上出来じゃな」

上からふわりと降りてきたレーヴェが、機能しなくなったその箱を受け取る。

開くと、中には機械がつめられている。

「やはり完全に機械の爆弾か……」

「それこの前も言ってたけど……何かあるの？」

「……今の時代、魔術を組み込んだ爆弾が作れる」

「うん？」

「けれど、”これ”はあえて完全に魔術を排除してあるんじ

「や

自分の思い過ごしであればいいのだが。

レーヴェは軽く空を見上げた。

「……続けよう」

「アルマ？」

「全部回収しちやえば、心配もなくなるよね？」

淡々とした物言いだ、おそらく氣遣つてのことだろう。
アルマの言葉に、レーヴェは笑みを返した。

回収した爆弾から、その技術の割り出し。

そして、そこから幾つかの機関に目星をつけての調査。

また、回収したルートから、犯人の足取りと目的を探る。

今日も騎士団は大忙しで動いていた。

（メッセージ、陽動……何にせよ、この爆発自体に何ら効果は無い、か？）

「また、考え事？」

「エヴァか」

「相変わらずね、本当……部隊長になっても変わらないんだから」

そう言って、半ば呆れたように、しかし優しくエヴァは笑っ

た。
昔は短かった栗色の髪も、今はかなり長く、高い位置で一つに縛られている。

「何か報告か？」

「ええ、関係在るかは分からないけど……戦闘痕を見つけたわ。強力な魔術による、ね」

「！……魔女、か？」

「可能性は在るけど……でも、だとしたら爆弾とは関係ないかしら」

そう言つて、エヴァはため息をついた。

解析した結果、爆弾からは魔術の欠片すら見つからない。アリオスは考えるように口元に手を当てる。

「……仮に魔女だとして、その相手は？」

「え……？」

魔女と騎士団の折り合いは良くは無い、それは事実。

しかし、だからこそ互いに線引きができており、無駄な争いはしないようにしている。

騎士団の要塞があるこの場所では、なおさら、魔女は大人しいことが多い。

それなのに、あえて目立つような行動を取るとは思えなかった。
魔女は、知識が高い集合であるのだから。

「……マレフィカルム
十字の鉄槌」

「え？」

「排魔主義機関だ。科学の普及と魔術の排除を謳っている」
そして。

「一部で”魔女狩り”をしているとのことだ」

「!！」

魔女狩り。

その名の通り、魔女を狩ることで、その手段は問わない。
排魔を理念とする機関にとって、魔女の存在はもちろん「い
らない」ものである。

「魔女狩りだなんて……そう簡単に許されることではないで
しょう!？」

「あくまで噂だ」

ただ、今回の事件が彼らと関係するのだとしたら。
考えに至り、アリオスは立ち上がる。
それを見て、エヴァは慌てて引き止める。

「直接話を聴くつもり!？魔女狩りを行ってるかもしれない
危ない機関なんですよ？」

「白”のほうにだ」

「白？」

「十字の鉄槌には、白と赫と二つの区分がされている」

”白”は、魔の排除と魔女差別を説いている、いわば穏健派。
対して”赫”は、それだけでは出来ない活動を補っている過

激派。

”白”は魔を排除する思想は持っているが、強行手段は好んでいない。

「今回の仕業がどちらにしる、”白”から見れば好ましいことじゃない」

「じゃあ、魔女以外の普通の市民の被害は、少なくとも広がらないと見ていいのね」

そう言つて、エヴァは少しだけほつとして息を吐く。

その言葉に、アリオスはふと、立ち止まった。

十字の鉄槌にとって、一般市民は布教の対象であり、寧ろ被害は出したくないはず。

『大抵は、人気の無い場所を狙うんですよね』

そう、例外はあった。

確かに建物も幾つか爆破被害にあつてはいるが、古い書庫であつたり廃ビルであつたり。

確実に人が居ないような場所ばかりであった。

”個人の家”を狙っていたのは、一箇所だけ。

今のところ、一番新しい被害場所。

ノウラの家だけ、だった。

「……………この辺りでいいでしょう」

人気の無い場所へやってきたノウラは、そう呟くと振り返った。

そこは、爆弾により破壊された瓦礫の後。

「ここなら、騎士団もすぐにはやってきません」

ノウラの声に答えるように、瓦礫の中から人影が現れた。

魔賊にも似た黒い装束、違う点は、アクセントに入れられている赤い模様。

そして、中心に飾られた十字。

「気づいていたか」

「ええ。最初は、巻き込まれただけだと思っただけですが」

少し俯いたノウラは、かすかに笑いながら呟いた。

「どうやら……巻き込んだ方だったみたいですね」

各地で起こされた爆破が人気が無い場所が多かったのは、他の被害を防ぐ為。

加えて、人気の無い場所にいることが多い者達を”炙り出す”為。

今思えば、廃墟となった建物や魔術書が保管された書庫は、魔女がいる確立が高い場所なのだ。

「そして、目星がついたから直接、狙ったということですね」
「その通りだ、よく分かっているじゃないか」
「追われるのは慣れてますから。特に、貴方達には」
「仕方の無いことだ、”宵待”」

その名を呼ばれたことに、ノウラがぴくりと反応する。
その笑みが、一瞬だけだが引きつるように消えた。
が、またすぐに何時ものように柔らかに微笑みかけた。

「まあ、私もそう生に執着心はないんですが……」

「貴方達の思い通りになるのは、真つ平ごめんです」

時刻は昼を過ぎた頃。
街の一角に、夜が訪れる。

魔女の呪い

男は、魔女が嫌いだった。

聞かされていたのは、魔女の悪行の数々。
見てきたのは、ろくでもない魔術を扱う者たち。

男は、魔術が嫌いだった。

異質な存在を、排除してしまうことの何がいけないのか。
魔術など、元はヒトが持っていなかったもの。
無くなったところで何の問題も無いではないか。
そして、そんなものをヒトに持ち込んだ、魔女も。

十字の鉄槌に入り活動を行いながら、その気持は次第に膨らむばかり。

そして、彼は行動を起こしたのだ。

起こしたのだった。

「もう、いいですか？」

何処からかはわからないが、少し高い位置からその声は聞こえてきた。

気は済んだか、と、疲れたように。

高い位置からなのは、恐らく彼女が立っていて、自分が手と膝を地についているから。

先程までの冷静な表情は、今や焦燥かそれとも別の何かに塗り替えられていた。

時間はまだ昼だったはず。

それなのに、男の視界には、真夜中の暗闇しか映らなかった。

(なん、で……こんな、ことに……)

男は、何が起きたのかを理解できていなかった。

覚えているのは、自分が刃物を持って彼女に襲い掛かったこと。

彼女はそれを避けるそぶりも見せずに、自分の右腕を差し出していたこと。

そして、彼女の腕から、”溢れ出した”こと。

気がつけば、彼の世界は”夜”を迎えていた。

もちろん、本当に夜が訪れたわけではない。

ノウラの瞳には、先程と何ら代わり無い昼の街が存在していた。

ただ、男に”夜が訪れた”だけであつて。

「私だけならともかく、周りにも迷惑がかかっているのです。」

少し反省してください」

男とは対照的に、ノウラは先程のままの笑みを浮かべて。まるで子供を諭すかの様な口調。
そう、男を相手にすらしていない。

男の背筋に、何かが通り抜ける。

「う………ウアアアアア………!!!」
「!!!」

突き出した男のナイフを止めたのは、アリオス。
男に向けてとっさにかざしたノウラの腕を止めたのは、白い衣服に身を包んだ別の男。

「悪いが、これ以上の手出しはやめてもらおうか」
「………」
「白”もいらっしやっただんですか、以外ですね」
「とりあえず”それ”を止めてくれ。まだ夜が来るには早すぎるんでな」

そう言いながら、ノウラの手を離す。
その白い袖に、黒く染みが広がっていった。

腕に布を巻かれて縛られるのを、ノウラはされるがままにしていた。

流れていた”黒い”ものが、とりあえず止まる。

「俺が来たのはこいつを引取りにだ。あんた達に直接どうこうはしないよ」

「……………私達、ですか」

「特にあんたの”呪い”は受けたくないんでね」

男はそう言つと、ノウラから離れる。

「それに、そちらの騎士さんの目もあることだしな」
「……………」

アリオスは無言のまま、抑えていた男のナイフを落とす。そして、男の首に手刀を叩き込むと、倒れたその体を支えた。

「分かつてると思うが、そいつの身柄はこっちで引き取らせてもらつぜ」

「……………さつさと持って行け」

「こっちでもしかるべき処分はする。騎士団の方にも、後で何らかの謝罪を送るだろうよ」

「いらん。から、騒ぎを起こさないようにしろ」

「俺にいわれてもな」

アリオスは、表情を変えないまま、白服の男に、倒れた男を引き渡す。

ノウラは何も言わずに、腕を押さえてその様子をただ見守っていた。

「それじゃあな。出来れば、もう二度と合わないことを願う」
アリオスに向けてか、ノウラに向けてか。
そういい残して、男はその場を立ち去って言った。

暫く無言が続いた後、ふとノウラがアリオスに視線を向ける。
それを合図にしたように、アリオスが口を開いた。

「十字の鉄槌、”白”のラウル・アーバストだ」

「聞いたことは、あります……だいが、幹部の方ですね」

どこか飄々として見えたが、倒れた男とは比べ物にならない
ほど冷静で理知的。

そして、強いということは分かった。

ノウラのこと、もちろん知っているらしい。

「今回の事件については、機関に任せるようにと、国からの
連絡があつた」

「……そう、ですか」

十字の鉄槌は、特殊な機関に分類されている。

その為、騎士団との中で幾つかの線引きがされているのだ。
とくに、”魔女”に関しては。

「帰るぞ」

「……………え」

ノウラにしては珍しく、あっけに取られた顔をした。
アリオスを見るが、その表情からは上手く思考を読み取れな

い。

「……何も聞かないんですね」
「話は聞く、が、帰ってからだ」

何かを言おうとするも、出てこないのか無言のノウラだったが。

「……こっちは昼も食べて居ないんだが」
「! ……じゃあ、急いで用意しないと」

何時もの様に、微笑んだ。

「……………」

「気がついたか……つっても、何も見えないだろうが」

担いだ男が目を開いたのに気づき、ラウルは声をかける。
男は、瞳をさまよわせながら、小さく何かを呟いた。
が、それは音とならず、空気に溶けていく。

「魔女の”呪い”くらい、知ってるだろ」

「……………」

「まあ、何の呪いなのかは知らなくても仕方ないがな」

「魔女の”呪い”」

「魔女がもつ特殊能力の様なもの。」

「魔女の中に流れる”血”によるものであり、その力は一人ずつ違うもの。」

「そしてその”呪い”は、魔女が畏れられる理由のひとつ。」

「……………分かったらどう、無闇に行動するものじゃあないってな」

「魔女が、魔術が嫌いだった。」

「嫌いなのは、自分達とは異質だから。」

「異質なのが、許せないから。」

「そう、思っていたのに。」

「……………い、と……………」

「？」

「今までだって、何度も魔女を”退治”したことがあった。」

「少し前にも、一人の魔女をこの街から”排除”した。」

「怖いと思ったことなんて、一度も無かったのに。」

「あの微笑が、脳裏によみがえる。」

「何も見えない闇の中で、それが浮かび上がる。」

「聞いていたラウルは、呆れたようにため息をついた。」

「馬鹿か。怖いと思ったことが無けりゃあ、お前、赫にいるわけ無いだろ」

ラウルは見上げる。

空に広がる黒の中には、小さな星屑がきらめいている。

「異質なのが怖いから、排除しようと思ってんだろっが」

何も映っていないだろう男の瞳から、一滴零れ落ちた。

そして魔女は微笑む

夕日が窓から差し込む部屋の中。
作っている料理を味見し、満足げに微笑む。

「……………あら」

もっていた小皿を置いて、橙に染まる窓に近づいていく。

「ずいぶんと綺麗ね」

ノウラは素直に感想を述べた。

窓を開けて腰掛けていたレーヴェの銀の髪が、淡く橙に染まっていた。

まるで、夕日に染まった水の綺麗な川の浅瀬の様にきらめいて。

「相変わらず、料理の腕はあるな」

「それは遠まわしに薬作りの腕が無いって言いたいのかしら」

「わかってるようじゃな」

「……………そろそろ来るころだとおもってたわ」

中に入ることを促すようにノウラが体の向きを変えたが、レーヴェは笑って首を横に振った。

「すぐ帰るつもりじゃ、遠慮する」

「ご飯くらい食べてくればいいのに」

「あのお堅い騎士殿とご一緒するのはお断りじゃ」

「あら、結構面白くなりそうなのに」

くすくすと笑うノウラをレーヴェは見る。

視線に気づいて、ノウラも見つめ返した。

「で、何処までしゃべった？」

「魔女だということと、私のことを幾つか。レーヴェのことは言わなくてもよかったかな」

「まあ、言わずとも知られとるよ……これでも、心配しとらんじゃ」

相変わらず微笑んでいるノウラに向けて、レーヴェはため息を吐く。

十字の鉄槌が起こした様なことは、何も今回だけではないのだ。

「特に、お前さんは色々と目をつけられとるじゃろっ」

「あら、レーヴェだって」

「まあ、暫くは大丈夫じゃる。頼もしい騎士もいることじゃ

し

「……そうね」

今回のことで、十字の鉄槌も少しは大人しくなるはず。

そして、他の排魔主義の者達も、同様に。

「もともと騎士団とは上手くいっとなるんじゃ。今回のことも、そう大事にはならん」

「そのようです」

事を起こしたりしなければ、平穩に暮らせるのだ。
そう、たとえ魔女であろうとも。

「だから、村には帰りませんか？」

「わかつとる。落ち着いたらアルマ達のところにも顔をだせ」

腰を上げながらレーヴェはそう言って、思い出したように付け加えた。

「ついでに治癒術でも習っておけ。どうせ未だに傷薬も作れないんじゃない」

「失礼な……………痛み止めくらいなら」

「……………」
「……………アルマちゃんにお願いしてみます」

軽く手を上げて、レーヴェは窓からひらりと降りた。

後日。

言われた通りカンラたちへ顔を出しにいったノウラは、その光景を暫く呆然と眺めていた。

机に突つ伏したまま動かないカンラと、その正面で気に留めず読書をするアルマ。

「……えっと、大丈夫？」

「多分……きつと」

「すみません、ちょっと最近生活に困窮していて」

寝そべって気力の無いカンラに代わり、まだ何とか大丈夫そうなるアルマが答える。

レーヴェのお陰で金銭面はぎりぎり何とかだったが、家計が苦しいことには変わりなく。

「えっと、じゃあ丁度良かったかな。造りすぎたスープをおすそ分けに」

「「頂きます!!」」

「ふーん……なんか大変だったんだなあ」

「まあ、少しだけ」

「家の修理はまだなんだろ？」

「ええ、もういつそのことあのままにしておこうかしら」

ノウラは事件のあらましをかいつまんでだけ話した。スープを胃袋に収めながら、カンラは話を聞いていた。

「兎がいればよかつたんだけど……怪我はもういいの？」

「ええ、もう全然。でも、今度良かったら治癒魔術教えても」

らおっかな」

「いいよ、ノウラならすぐ覚えられると思う……誰かと違って」

そついわれて動きを止めたのはカンラ。

不思議に思いノウラはカンラを見たが、すぐに、ああ、と手を合わせて。

「カンラ君にも教えたことはあるのね」

「確かに、”教えたこと”はありますね」

「ご馳走様！ノウラ料理上手いな！すっごく上手かった！！」

ごまかすように大きな声で言うカンラを見て、ノウラは笑い、ため息を吐いたアルマは空になった皿を片付けるために持つて立ち上がった。

カンラが差し出した皿も受け取り、一緒に持つていく。

「なあノウラ」

「はい？」

不意に名を呼ばれて、ノウラは振り返る。

目が合うと、カンラはいつもの様な笑みを見せた。

ノウラのそれとはまた違う、輝くような強い笑顔を。

「何かあったら遠慮なく俺たちに仕事持ってきてくれよな」

「え……」

「雑用から大事件まで、何でも請け負ってるから」

「勇者は”みんな”のものだからな」

屈託なんてまったくなかった。

ノウラはふと、眩しさに目を細めそうになる。

「……ええ、ぜひ」

「そしたらこっちも助かりますね、金銭的な意味で」

「まあ、ノウラは友人料金だからお安くしとくぜ？」

やっぱり、私はまだ帰らない。

ここにいる。

ノウラの心は、そう決めた。

そしてまた何時もの様に、笑顔を浮かべて。

「ありがとう」

二人に向かって言った。

探し物

その日、カンラとアルマは仕事を請けて別の街に来ていた。その街のとある料亭、街の雰囲気に合わせてか、独特の造りをしたそこで。

付け加えるなら、普段は決して入らない、入れない場所。

つまり、”高級”。

「……………大丈夫なんだよな？」

「うん……………たぶん」

「大丈夫ですよ、費用は私が持ちますから」

そう言っただけで現れたのは、どこか民族風の衣装を纏い微笑む女性。

微笑みながら、ゆっくりとお辞儀をしてみせる。

あたりを見渡し落ち着かない二人は、その言葉にほっとした。

席につき、早速食事に手を伸ばすカンラの掌をつねって止めながらアルマが口を開いた。

「”探し物”についての依頼、とのことでしたが」

女性は笑みを浮かべたまま頷いた。

「私達の里では、古くから神獣を祭っているんです」

「神獣？」

「ええ。……竜、です」

竜は、魔物とは違った生物である。

遙か古より存在し、常に他の生物を見守る立場にあったとされる。

いわば、全ての生物の上等にあたる。

ただ、常日頃には姿を現さないものであり、今でも存在しているのかは不明。

それでも、確かに存在したということは事実。

「じゃあ、探し物の”竜の瞳”っていうのも？」

「ええ……といっても、生きた竜から取るわけではなく、昔のものなんですが」

竜の寿命は、少なくとも数百年以上。

その体の一部分であっても、同じように永い時をすごしている。

途方も無いその時間の概念に、カンラとアルマはほづ、と口をあける。

「やっぱり、祭ったりする為に必要なのか？」

「……………いえ」

カンラの問いに首を振って。

女性はしばし沈黙し、瞳を閉じた。

「竜の身体の一部は、昔から薬や武器に重宝されてきました」
その鋭い爪は武器に、鱗は防具に。
そしてその血は薬に。

「瞳にも同じように、力が宿っているとされています」
「力……」

「具体的では無いのですが、よく言われているのは”全てを見通す”力を得る、と」

「全てを見る……未来とか？」

そんな感じだと、女性は頷いた。

そして、その様なものが人の手に渡った場合。

どのように利用されるかはその人にもよるが、嫌な方への考えは尽きることなく多い。

「竜を祭るものとして、彼らの残したものがどう使われるのかも、管理しなければなりません」

「つまり、悪用される前に探し出す、というわけですか」

「……でも、どうして私達に？」

疑問に思った点を、アルマは尋ねた。

「私達」と言うのは、所謂ハロウから仕事を請けている者のこと。

話を聞いていると、どうやら今回の仕事はそれなりに重要物の探索。

普通なら、そう言った仕事はまず国、つまり騎士団に回されることが多い。

「理由は色々言えますが……要は、不仲です」

「なるほど、よくわかります」

女性の答えにそう言ってうなづきながら答えたのはカンラだった。

”神獣を祭る村”の様に、特殊な特定思考を持つ集合体と言うのは、国と対立しやすくもある。

”魔女”にもそう言うことが出来るように。そしてカンラ自身も、よく体験することであった。

「わかりました、依頼をお引き受けします」

「ありがとうございます、それじゃあ詳しいお話に移しますね」

女性は机の上に一枚の紙を差し出した。

それはこの国周辺までを表示している地図。

そのある一点に、指を差す。

「霊峰ドラグーン」

「名前からしていかにもですね」

「古の竜の棲み処として知られています。同時に、魔物の棲み処でもあります」

「もしかして魔物が大量に湧くとか」「確かに数もそこそこ多いのですが」

女性は少し疲れたようにため息をつく。表情は、依然微笑んだままだが。

「途中、道を塞ぐ魔物の”種族”が、問題でして」

「種族？」

「神獣の、眷属なのです」

神獣である竜に近い魔物。

神獣を守る者は、倒すことはもちろん手を出すことさえしてはいけないのだ。

例え、自身の身が危険であろうとも。

それが、掟。

「それで、依頼を出したんですね」

「でも、良いのか？神獣の眷属をやっつけても」

「ええ。村の者が手出しできないといっても、危険を感じれば退治を依頼することもあります」

要は、自分たちが直接手を出さなければ良いということ。

掟は古くから守り続けられてきた。

そう簡単に変わることは出来ないが、少しずつ時代に対応させることは出来る。

「おかしいと思うかもしれませんが、古い村ではよくあることなんです」

「なるほど」

カンラは納得してうなづいた。

それまで地図を見ていたアルマが顔を上げる。

「竜の瞳がありそうな場所は、分かってるんですか？」

「ええ、一応目星はついていますが。その場所までは私が案内します」

「え、でも」

「一応私も武術の心得はありますから」

自分の身は守れるし、眷族以外の魔物であれば戦うことも可能である、と。

女性は拳を作った腕を小さく掲げてみせた。

「それでは、よろしくお願いします」

「じゃあ早速行くか！えっと……」

あ、と女性は口元に手を当てる。

自身の名を名乗るのを忘れていたことに気づいたのだ。

「麒麟と、申します。よろしくお願いしますね、お二人とも」

首を軽くかしげて、満面の笑みでそう告げた。

霧と魔物

薄い霧があたりを覆っているものの、天気が良いお陰か視界はそれほど遮られることは無く。

しかし、普段より足元が悪いのは事実。

「足元には十分に気をつけてくださいね、でない」と

霧に覆われて見えない深い底を見ながら、カンラとアルマは無言で頷いた。

ほぼ一人しか通ることの出来ない道を渡りながら、二人を先導するように、麒麟はすすいと足を進めていく。

「凄いスムーズですね麒麟さん……」

「まあ、うちの村も似たようなものですから」

「ほんとにそれ村なの!？」

「皆修行の一環だと思ってます」

「毎日が修行!？」

げんなりとして、カンラが言つと、麒麟は苦笑いを浮かべた。

「古くから、神獣を守る術として武術が浸透してきましたから」

「だから、麒麟さんも武術の嗜みが在るんですね」

「そういうことです。辺鄙な村なので、自衛をしなくてはいいけませんから」

辺りの霧がやや薄くなる。
ようやく開けた場所へと出て、カンラは大きく息を吐き出した。

そして、あたりを見渡してみる。

「地図だと、竜の住んでる場所はもう少し先だっけ」

「ええ」

「で、ここは」

アルマは呟くと何処からか分厚い本を取り出して開いた。

「例の魔物が出る場所」

言ったと同時に襲い掛かってきた魔物に向かい、アルマが本をもつ手を向けた。

そして放たれる雷光が、魔物を弾き飛ばす。

「うおお!？」

「カンラ、そこ危ない」

「先に言えよ!!!」

「!次、きます!」

戦えない為邪魔にならぬよう後ろに下がった麒麟が叫ぶ。
翼を持った魔物は大きな爪を振り下ろしてきた。
今度はカンラがそれを構えた武器で受け止める。

ガキン

「　　　　　つう……痺、れた」

「大丈夫ですか!？」

「……大丈夫、折れてない」

「剣か!俺は!？」

「それくらいじゃ折れないで、しょ」

麒麟の問いに何故か答えたアルマに、カンラが叫ぶ。

振りかざされた爪を交わしながら、アルマは更に答えた。

叫びながらも痺れる腕を振って感覚を戻しながら、もう一度魔物と退治する。

魔獣。

低く唸る声はさながら猛獣。

その四肢についた大きな爪が、地をえぐって再び飛び立つ。

「上からの勢いがあるから力じゃ負けるな……アルマ!」

「……了解」

カンラの呼びかけに、アルマはもう一度本をかざした。

そして軽く眼を閉じる。

「地を穿つ天の咆哮　　」

「　　つらあ!!--」

静かに言葉を紡ぎだしたアルマと反対方向に、カンラは魔物を押す様に飛び掛った。

先程の様に一撃を食らわないように、攻撃を繰り返し続ける。

真剣なまなざしで見つめる麒麟の横を、不意に風が通った。それは、アルマを中心とした渦の様に集まる空気の流れ。

「 サンドラ 」

アルマの言葉が紡ぎ終わるとともに、光と共に放たれあふれた。

同時に屈んだカンラの上を鋭い稲妻が走りぬける。それは、僅か一瞬のこと。

かすかな唸り声を上げながら、魔物はゆっくりと地に降り立ち、倒れた。

「 ……大丈夫そうですね 」

「 はあ……疲れた 」

完全に気を失ったのを確かめ、麒麟はほっと笑みをこぼす。そして、疲れて座り込んだカンラに駆け寄った。

「 少し気を回復しましょう 」

「 お 」

そう言って、かざした掌から光がこぼれる。暫くその光を浴びて、カンラは立ち上がった。そして、腕や胸を確かめるように動かして。

「 ……おお、何か楽になった！ 」

「 武術を利用した回復術ですか 」

「 ええ、よくお分かりで 」

「最近それに助けてもらったもので」

本をパタリと閉じて、アルマは周囲を見渡す。
しんとして、物音も聞こえない。

「他には居ないみたい」

「……………変ですね、もう2、3対は来るものと思っていたので
すが」

麒麟が訝しげに周囲の気配を探る。

あたりにはまだ、白い霧がかかっている。

「……………」

「カンラさん？」

「どうしたの、大人しい」

「んー……………いやさあ……………」

「……………何か、嫌な予感すんなあ……………」

カンラの呟きは、静かに霧の中に解けて言った。

「……………」

眩いた人物は、足元の石を踏み潰した。
砂になった石は、風で舞い上がり霧の中に消える。

「見つけたぜえ？ドラゴンちゃん」

にやりとした笑みを顔に貼り付けて。

男が見据えた先に、霧の隙間からの光を浴びて。

”それ”は光り輝いた。

爆発的自己紹介

「……これは」

「予感的中かよ……」

疲れたようにため息を吐いて、カンラはあたりを見渡した。先程先頭を行った場所から更に奥の広間。

沢山の足跡と、崩れた壁の岩。

少し前まで、誰かがここにいて、何かをしていた証。

「……恐らく、噂をかぎつけた何らかの集団でしょう」

荒らされた跡を見つめて、麒麟は笑みを消す。

跡から見て、団体なのは間違いないだろう。

そして、この場所を重点的に調べているということは、その狙いも分かる。

「……急いで先に進みましょう」

「そうだね……カンラ？」

「……あ、うん。何でもない」

周囲にふと感じた気配に、懐かしい感覚を肌感じて。ぼーっとしていたカンラは慌てて二人の後を追った。

洞窟の奥へと入り込むにつれて、物音が聞こえ始めた。3人は足を止め、岩に隠れながら、音の方を確認する。

「！下がって」

麒麟の咄嗟の声に、カンラとアルマは素早く身を引く。瞬間、そこへ鋭い刃物が飛んできた。

「よお、そこにいる奴……いや3人、出てきな」

隠れても無駄だと判断し、3人は岩陰から出た。

待ち構えていたのは、大柄な男と他数人。

先程投げしてきたのと同じものだろう、投げナイフを手元で遊ばせながら。

「残念だったな、今の俺からはどんだけ気配を消したって隠れられねえぜ」

「それは……!?!」

「悪いがこれは俺たちが頂いていくぜ！」

男の手の中にある物を見て、麒麟が眼を見開く。

琥珀色をした、丸い宝石の様なそれは、男の手の中で光を受けて反射していた。

硬くもやわらかい雰囲気をしたそれは確かに、「瞳」。

”竜の瞳には全てを見通す力がある”

” 男がその力を手に入れたかは不明だが、少なくとも通常より
” 視る” 力を得ている様だった。

「貴方達は何者ですか」

「いいだろう……しっかりと聞け！」

「!？」

「何だあ!？」

男が手を振り上げると同時に、大きな音と地響き。
辺りに靄とはまた別の薄い煙。

「宝の匂いを嗅ぎ付けて！」

どん!

「西へ東へ南へ北へ！」

どどん!

「縦横無尽、傍若無人!!」

ばばん!!

「」「」「我ら、かけろ鉤狼団!!」「」「」

ばーん！……！

「……………」

「まあ……………」

「資源と熱気の無駄遣い……………」

「おいこらテメェら！！もうちょっと反応しやがれ！！！」

恐らく専用の爆薬でも用意していたのだろう。

爆発まで利用した、何とも派手な名乗りを。

口をあけて、驚いたというよりは呆れたように見つめるカン

ラ。

口元に手を当てて微笑む麒麟。

ぼそりと呟いたアルマ。

それぞれの反応に、親玉らしき男が不満げに声を上げた。

「何でそんなに反応薄いんだよ！？」

「いやー、何か違うんだよなあ……………」

「何だろう……………悪っばさが足りない気がする……………」

考えるカンラの隣で、ちらりと横目にアルマは呟いた。

「盗賊か山賊かその別かは知りませんが、”それ”を渡すわけには行きません」

「残念、はずれだ。俺たちは”コントラクター請負賊”だ」

「「！！」」

「こんとらくたー……？」

その言葉に反応したのはカンラとアルマ。

その表情が先程までの呆れとは違い、面倒くさい、という顔になる。

「どういった方々なんですか？」

「あー……何ていうか、そのままだな」

「言葉通り、正式に”請け負って”賊行為”を働く者のことです……これが非常に面倒な存在で」

アルマはため息を吐いた。

請負賊が普通の賊と違うのは、自らではなく別の者により請け負って行動している。

そして、その”別の者”というのが、非常に厄介な存在であったりする。

例えばそれが、名のある家柄の者であったり。

「場合によっては国では取り締まれない、認可された賊とみなされます」

「ハロウでは取り締まれるけど、正式な依頼が必要になるんだ」

仕事の依頼内容によっては、一般的には賊行為とみなされないこともある。

公平な機関であっても、その判断は難しいのだ。

「……それは、面倒ですね」

鉤狼団の雇い主が誰かはわからないが、態度からして簡単には捕まえられないのだろう。

そして、それは彼ら自身に関しても同じ。

「ハロウの仕事だろうが、依頼内容が違う。お前達は手出しできないというわけだ」

竜の瞳の力が、カンラ達の依頼内容も察したのだろう。

男はそう言うてにやりと笑う。

「……構いません、ならば私が」

輪って入ったのは、麒麟だった。

「私が、直にお相手しましょう」

「な……」

「国もハロウも、高貴な家柄だろうと、我が”神羅”には関係ありませんから」

にこやかに、そして穏やかに麒麟は言い放つ。

構えたその姿は堂々とし、威圧感さえ感じさせる。

「……面白い、俺たち相手に一人でやるうってのか」

「……」

「……いいだろう」

鉤狼団の面々は武器を構え始める。

「麒麟さん……!？」

「お二人は下がっててください。仕事は先程、十分していただきましたから」

カンラとアルマの仕事は、竜の瞳を探す際”道を塞ぐ魔物の相手をする”こと。

確かに、依頼の目的は達成している。

「……了解、じゃあ依頼はここで終了だ」

「ええ、ありがとうございます」

「じゃあここからは本業に入らせてもらっぜ？」

「……カンラさん？」

武器を取り出し構えて、カンラはにやりと笑みを浮かべる。
その剣先を男達に向けて。

「依頼抜きで俺たちとやろうつてののか？はっ、随分なお人よしだな」

「いんや？ただ本業を行うだけだぜ」

「は？」

「たった今、俺は竜の瞳が”必要”になった」

「え……」

麒麟が張り詰めていた空気が少し緩む。

カンラの意図がわかってか、アルマは少し後ろに下がる。

「勇者の前じゃあ全員平等！国も機関も関係なし！つまりお前らが誰の請負だろうと関係なし!!」

大きな声で言い放ち、びしっ、と指を差す。

指し示されたのは鉤狼団、ではなく。
その手に持たれた、輝くもの。

「と云うわけだ！！その竜の瞳、一旦俺が貰うぜえええ！！」

「え……！！？」

「なにい！！？」

言うが速いか行うが速いか。

カンラは竜の瞳めがけて飛び込んだ。

か………)
(………普段から、より悪の姿を見るから物足りなかったの

袖で口元を覆い、あたりに舞う土煙を払いながら。

先程の疑問が説明、すっきりしたようにアルマは瞳を閉じて
ため息を吐いた。

あひま

勢いよく突っ込んだカンラは、次の瞬間には少し高い岩の上に居た。

舞う砂煙がゆっくりと晴れ、その中で咳払いをする男達の姿。まだ、竜の瞳はその手に握られていた。

「直感が働いたって無駄無駄あ！！！」

「て、テメエ無茶苦茶すぎるだろ！！？」

「馬鹿者、俺に無茶など無い！！！」

「それが既に無茶」

少し離れた別の岩の上に腰掛けてアルマは呟く。

勇者ではない彼女は大っぴらに手を出すことが出来ないからか、傍観を決めたのか。

いつの間にか被害の及ばない位置まで下がって。

「くそ……お前ら、奴を集中して狙え……！！」

「余所見をされていていいんですか？」

「ぐ！？」

腕から竜の瞳がこぼれ落ちる。

すかさず反対の手でそれを押さえながら、男は唸った。

「なんだ……！？腕が痺れて……」
「ちよつとだけ仕掛けました……それでも離さないのは、中々の執念ですね」

にこりと、麒麟が浮かべたのは思わず綺麗だと思ふ微笑み。
しかし、見とれているような状況ではない。

見渡すと、男の部下も数人ほど、痺れたのか腕を押さえてうずくまっていた。

先程カンラと退治している間にやられたのだろう。

男は眉間に皺を寄せて、腕を無理やりに振るった。

「このっ……！」

ひらりと交わして距離をとり着地する。
そして、今度はカンラ。

「っらあ……！」

「っお……？」

男の、竜の瞳を持つほうの腕めがけて思い切り武器を振り下ろす。

しかし、飛んできたナイフによりそれは防がれた。

投げたであろう鉤狼団の部下は更にまたナイフを構える。

「駄目ですよ、危ないじゃないですか」

「！？」

いつの間にか移動していた麒麟が、男の手元を払ってナイフを落とす。

そして、男の鳩尾に一撃を叩き込んだ。

「くそ、こいつら……」

揃っていないようでもかみ合った攻撃の組み合わせに、男は押されていた。

一方でカンラは、戦闘のやりやすさに笑みを深めていた。

「この……ガウル様を舐めるなよ!!」

「つとお!？」

「なんて力技……!!」

力任せに、腕を地面に叩きつける。

衝撃に割れた地面が岩を突き出して襲い掛かる。
交わしたカンラと麒麟に、土煙が降りかかった。

「野郎共、ずらかるぞ!!」

「なあつ!？」

「俺たちの目的はこれを持ち帰ることだからな……引くのも云わば一つの道よ!」

「しまった……!？」

岩が崩れたその場所へ、土煙に紛れて移動していた鉤狼団は走り出す。

煙と岩に阻まれ、出遅れた麒麟は思わず声を上げる。

「フハハハ、逃げるが勝ちってな!!」

高い場所から、男　ガウルは笑い、見下ろした。

見上げて表情を歪めていたカンラはふと気づいて、男の”向こう”の空を見た。

懐かしい、感覚。

「……………！！二人とも、岩場の影に入れ！」

「え……………」

「カンラ？」

「早く！」

自身も岩場に隠れながら、カンラは叫んだ。

状況をつかめないまま、アルマも麒麟も言われたとおりに動

く。

「！う、うわああああ！！！」

「か、頭あ！！！」

「！？何だ、どうした！！！」

部下達の突然の叫びに、男は振り返る。

「……………な……………あ……………！？！」

崩れた場所からこぼれる光を遮るような大きな影。

その大きな”羽”は空を隠すように広く、音を立ててゆれて。その吐息すらも、突風を巻き起こし。

そして、鋭く抉られる様な眼差しが一つ。

「まじっ」

「まじまじーっ」

「まじまじまじまじまじまじ」

「」「」「ドブゴンンンン！ー！ー！？？？」「」「」

岩場の壁をすり抜けて。

驚愕の叫びが響きわたった。

古の友人

優雅、と言うよりは雄大に羽ばたいていた竜は、岩場に足をかけて留まった。

ゆっくりと、その羽の動きを止める。

『貴様等、我が寢床に何用だ』

「ひ、ひいいっ!？」

一番竜の近くにいた鉤狼団の部下が、尻餅をついてそのまま後ずさる。

それは、恐れというより、畏れ。

「……………」本体”もいるなんて、聞いてねえぞ……………」!

『!……………」ほう、なるほどな』

ガウルの小さな呟きを聞き取ってか、竜はそちらへ視線を動かした。

そして、そこにあるものに眼を留める。

『我が”おとしもの”を求め来たか……………』

「おとしものって……………竜の瞳?」

竜の言葉に、アルマが呟く。

竜の瞳は、依然ガウルの手の中。

『既に落としたものに興味は無いが……無闇にヒトの手に渡すものでもない』

「なっ……」

グオオオオオオオオオ

そう言ったかと思うと、竜は突然大きく咆哮した。

その場に居た全員が、その威力と迫力に押しつぶされないように耐える。

しかし、力が抜けたその手から、竜の瞳がこぼれ落ちた。

『去れ。まだ自身を冷静に案じられるのであればな』

ガウルは辺りを見る。

既に部下達は戦意を喪失し、力が抜けたように座り込んでいた。

「……俺も部下を無駄死にさせるようなことはしたくないんでな」

「お前……」

「頭として当然のことだろう？……諦めたわけじゃあねえからな……野郎共！！」

ガウルの大声に、部下達は反応して立ち上がる。

そして次々と、竜のいない方向から、岩場を抜けていった。

最後に抜ける前に、ガウルは立ち止まり、振り返った。

「覚えとけ、しつこく狙っひっかける、それが鉤狼団だ」

そう言って、部下達とともにその場を去っていった。

「……まああれだけのインパクトある名乗り、忘れないよね」
「名前は忘れそうだけどな……っと、そうそう」

カンラは竜の瞳が落ちている場所まで歩き、それをひろった。
色々あったが、傷などは見当たらない。

「よっし、竜の瞳ゲット！」

「……で、どうするの？」

「ん？んー、そうだなー」

アルマの問いに考えながら歩き、カンラは麒麟の前に立った。
そして。

「手に入れたけど特に必要ないし、管理も大変だし、誰かも
らってくれないかなー」

「……私達でよければ、お預かりします」

「お、じゃあ頼むな」

麒麟は微笑むと、差し出された竜の瞳を受け取った。

「これで仕事も完了だな」

「ええ……………あ、でも」

麒麟はちらりと目線を動かす。
未だ荘厳に佇む竜へと向けて。

『ふむ……………”神羅”のものだな』

「！お分かりですか」

『あの者達は独特の気配を持つからな』

「……………お初にお目にかかります。私の名は麒麟^{わたくし}、神羅に属するものです」

『ふむ、麒麟とやら』

そう言つと、竜は少し考えるように目を閉じた。

『お前達ならば”それ”を持つことも構わん。もっていくが
よい』

「……………ありがたく」

麒麟はほっとしたように笑みを和らげると、竜の瞳を掲げると、
よつにお辞儀をした。

満足したように竜はうむ、と呟く。

そして、今度はカンラへと視線を向けた。

『久しいな。相変わらずのようだが』

「お互い様だろ？というかお前の眼だつたんだな」

「……………え、知り合い？」

「ん？ああ」

アルマの呟きに、カンラは当然の如く軽く答えた。

「前に何度か会った事があったな。まあ、俺一応勇者だし」
「それ関係あるの？」

『勇者と我らとは……そうだな、お前達の言う”友人”か』

「……それは、お疲れ様です」

「え、アルマ、それどういうこと？」

「……あの、少し気になることがあるのですが」

『ふむ、何だ？』

麒麟が少し遠慮がちに声をかける。

なにやら言い合っていたカンラとアルマもぴたと言葉を留めた。

「これは……”貴方の”眼なんですね？」

竜の、傷のついた片目を見ながら麒麟は尋ねた。

”一つ”の視線が、麒麟を見つめ返す。

『そうだ』

「……どうして”落とす”ことになったのか、お聞きしても

？」

『………私の不注意だ、とだけ言っておこう』

含むように、竜はそう告げた。

有無を言わさぬ、続きを聞けないその雰囲気、麒麟は尋ね

るのをやめた。

「あの、私も聞きたいことが」
『なんだ？』

今度はアルマが手を上げて尋ねた。

「竜はヒトの言葉を”発する”ことができるんですね？」
『ふむ、その通りだ。厳密に言えば”話す”ことはできない』

一種のテレパシーのようなものだ、と竜は告げた。
なるほど、確かに竜が言葉を放つ際にその口元は動いていな

い。

『しかし、そうか……』

ふと、竜は視線を動かした。
その視界に、アルマをとらえて。

「？」

『その娘、名は何と言う』
「アルマです」

『そうか……』
「？」

竜は、今度はカンラへと視線を向けた。

『……縁があればまた会っただろう、その時はまた、昔話でも
しよつではないか』
「……だな」

「そうですね」

「私の方も、ぜひお願いします」

軽く手を挙げたカンラに、お辞儀をするアルマと麒麟。
答えるようにうなづいて、竜は体を起こす。

『さらば、ヒトの子らよ』

そう言うと、ゆっくりとその羽を動かしはじめる。

巨大な空気の塊が、羽の動いたびに放たれる。

そして、空気を押し出すように、竜は高く、高く飛び上がった。

その姿は、すぐに青い空の中へと溶けるように消えていった。

「……………なんだか、色々ありましたね」
「確かに……………」

霊峰の出口。

霞が無くなるあたりまで歩き、カンラは大きく伸びをした。

「ま、とりあえず仕事が無事に終わってよかった」

「ええ……聞いていた通りのお手並みでした」

「え？」

少し先を歩いていた麒麟が、くるりと振り返り、微笑んだ。

「今日は本当にありがとうございました」

「また何かあったらいつでも言っして下さい」

「ええ、カンラさん、アルマさん」

ただ、と少し駆け出して。

あ、と思い出したように、麒麟はもう一度振り返った。

「……兔によろしくお伝えください」

「……え？」

次の瞬間、まるで霞の様に彼女の姿は消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8819u/>

勇者の勇者による勇者のための

2011年11月3日02時17分発行